

日本語の乱れ発見帖 ……新聞を主たる材料として……

島内景二

1 はじめに

近年、「日本語の乱れ」が叫ばれている。「美しい日本語」は無理としても、せめて「まちがいでない日本語」を使いたいと願っている人々は、多からう。その一方で、大学生を含む若者の日本語能力の低下が指摘されている。

それでは、かつては「正しい日本語」の handbook として位置づけられていた新聞における「日本語」の現状は、どのようなもののだろうか。本稿では、わたしが購読している朝日新聞を主な材料として、「日本語」の現状について考えてみたい。わたしが一読して「おかしい」あるいは「変だ」と感じた用例を、これから紙数の許す範囲で列挙してゆこう。そして、新聞紙上で起きている日本語の乱れが何を意味しているのか、その文化的要因を具体的に考察してゆきたい。

なお、本稿では朝日新聞を取り上げる機会が多いが、それはわたしが毎日読んでいて最も親しみがあつた、かつ現代日本文化に与える影響が最も大きいと思われるからである。それ以外に、何の意図もない。

具体的な事例を「逆年順」に配列したので、新しい日付から古い日付へと時間が遡る。用例を採取した日付に粗密があるのは、わたしが新聞をゆつくりと読める時にはたくさん具体例に気づき、多忙の日々がつづいた時にはほとんど気づかなかつたというだけの理由である。また、時として「広告」も取り扱うが、これは狭義には新聞社の問題ではない。新聞紙上で発見した例ということで、ここに含めてある。

なお、本稿は活字になったあと、教室で教材として活用したいと考えている。その時の聴講学生の便を図って、難解な漢字には読み方を示した。また、学生諸君に講義する口調で、いくつかの言葉を説明した件（くだり）もある。御了承いただきたい（「ごりようしよう」の際には「御了承」がよく「ご了承」は避ける。

「おねがい」の際には「お願い」がよく「御願ひ」は避ける。
なお、誤植や日本語の乱れを糺す（ただし）という本稿の趣旨を貫徹するため、本稿には誤植や表現未熟が一つもないように努力したが、いくつかは変換ミスが残るだろう。恥ずかしい限りである。その節はひらに御海容いただきたい。

2 乱れた日本語の具体例

【一九九九年九月十九日・朝日新聞・朝刊・11面】

読書欄。田辺聖子氏の「いつもそばに、本が（下）が載っている。『源氏物語』はお好き」という見出しがあり、『源氏物語』の研究者のわたしは思わず引き付けられた。その中の一節。

日本にも文豪はたくさんいるが、畏るべき後世は（われわれオトナが若輩者をいかに慙笑しようとも）畏るべきエネルギーで、先覚を超えるだろう。ただ、『源氏物語』を超えることはむづかしいだろうと思う。

谷崎は超えられるべし。漱石・鏡花・鴎外また、超ゆるものあらん。
しかし誰か、紫式部を超えるものがあるだろうか。

この文章の趣旨には、深く頷く。「畏る」「慙笑」「誰」という常用漢字表にな漢字についても、「おそろ」「びん笑」「だれ」などと平仮名表記にできなかったのは、書き手が文学者・田辺聖子氏であるからであろう。

ただし、「畏るべき後世は」の部分に、まず疑問を感じる。「先覚」という言葉の反対語であり、「後生畏るべし」という諺を使って書いているのだから、当然「畏るべき後生は」とあるべき箇所ではなかろうか。「後世」にも、「子孫」の意味はあるが、「後生」とあるのが自然である。

次に、「谷崎は超えられるべし」という文章。これは、文語文ならば、「谷崎は超えらるるべし」とならねばならない。文語の助動詞「べし」は、動詞の口語の

活用につづくのではなく、文語の動詞の活用形に接続するはずだからである。このような、文語でも口語でもない、奇妙な日本語が次第に流通するようになっていく。現代短歌でも同様の事態が出来（しゅつたい）していることについては、『短歌研究』一九九九年六月号から八月号までのエッセイで警鐘を鳴らしたので、参照いただきたい。「べし」や「なり」を安易に口語体に接着させる傾向があるので、注意を喚起しておきたい。

わたしの最大の疑問は、この文章が田辺聖子氏の執筆通りの印刷なのか、口述筆記なのか、それとも変換ミスなのかということである。まさか田辺聖子氏が、この程度のミスを犯すとは信じられないからである。

【パンフレット『上野』平成十一年九月号】

上野の美術館めぐりをしていて、入手した。浦井正明氏「海舟と上野・Ⅲ」という文章が載っている。勝海舟の漢詩が引用されている。その一節。

空（雲）に聳ゆる雄閣、已に薪と化す

「已に」の箇所には、「すでに」というルビが振ってある。「すでに」ならば「已に」でなければならない。

かつては、高校で「已然形」という言葉を学ぶついでに、「已（み）は上に」（上まで突き通す）、「已（おのれ・つちのと）下に付き（一切突き出さない）」、「已（すでに・やむ・のみ）中に付くなり（半分突き出す）」という教訓歌を記憶したものである。

【一九九九年九月十七日・朝日新聞・朝刊・1面】

「天声人語」欄の下に広告欄。本の宣伝がある。

自由律俳句雑誌の復刻版

層雲

萩原井泉水Ⅱ主宰 一九一一―一九二七刊

この『層雲』の復刻は、大変に意義深いことだと思う。前衛短歌に興味を持つ人間として、わたしも俳人・尾崎放哉には強い関心を抱いている。だが、主宰者の名前は「萩原井泉水」だっただろうか。否、「萩原井泉水」である。誤植とはいえ、罪が重いやわねばならない。

「萩」（はぎ）は、草冠の下に「秋」の字を書くから、秋を代表する美しい文化的な植物であり、『万葉集』で萩は大いに愛（め）でられた。「萩」（おぎ）は、

草冠に「狄」という字を書くから、野蚕で瘦せた土地に咲く荒地地の（美的でない）植物である。まったくイメージが違う。ちなみに、古典文学では、「萩の上風（うはかせ）、萩の下露（したつゆ）」という取り合わせである。

なお、「萩原朔太郎」を「萩原朔太郎」と誤植することも、ないではない。また、松尾芭蕉の名句「行き行きて倒れふすとも萩の原」を、「行き行きて倒れふすとも萩の原」と誤って書き記した「芭蕉翁自筆短冊」が古書店で売られていたという笑い話もある。

【秩父鉄道・秩父沿線ニュース・平成十一年九月号】

西武池袋線で入手した。「特別ハイキング」の募集がある。

巾着田の蔓珠沙華と高麗神社を訪ねて

「マンジュシャゲ」は、「蔓珠沙華」と表記するのが普通である。「まんだら」も、「曼荼羅」「曼陀羅」などと表記する。「蔓」は、「つる」という文字であり、蔓珠沙華のイメージから外れてしまう。

【一九九九年九月九日・朝日新聞・夕刊・7面】

音楽の広告欄に、コンサートのお知らせがある。

ハノイ国立音楽院管弦楽団

ダン・タイ・ソンを輩出した音楽院のオーケストラ 来日公演

わたしは、ダン・タイ・ソンのピアノが好きである。生演奏も聞いたが、極度に緊張する性格のようなので、オーケストラとの協奏曲の共演ではなく、ショパンのピアノ曲を一人で演奏するのが得意であると思われた。

さて、この広告は、どこがおかしいのか。「輩出」という漢字は、正しい。けれども、「輩出」とは、たった一人を送り出しただけでは使わないのであって、少なくとも「三名以上」を卒業させていなければおかしい。著名な人物の場合には、特に二名でも許されるかもしれない。「ダン・タイ・ソン、★★らを輩出した音楽院」とあるべきであり、もし「ダン・タイ・ソン」以外に日本に知られた卒業生がいないのであれば、

ダン・タイ・ソンが学んだ音楽院のオーケストラ 来日公演

と書かねばならないだろう。

【一九九九年九月九日・朝日新聞・朝刊・29面】

このスポーツ欄には、セ・リーグ二位の読売巨人軍が首位の中日を猛追していることが報じられている。富森揚介記者の記事本文の末尾には、次のようにある。

長嶋監督は「ベイ（横浜）の3割打線をよく2失点に抑えた」。4連敗した前週に雲行きがややしくなってきた投手陣の踏ん張りに、最後の反攻への光明を見いだしたいようだった。

この文章は、まちがいでない。むしろ、丁寧に言うならば、

長嶋監督は「ベイ（横浜）の3割打線をよく2失点に抑えた」と語り、4連敗した前週に雲行きがややしくなってきた投手陣の踏ん張りに、最後の反攻への光明を見いだしたいようだった。

とあるのが理想である。行数の関係で、省略されたのだろう。これは、許容範囲である。ただし、肝腎（肝心）とも書く）の「小見出し」に、

反抗へ光明

とあるのは、変換ミス以外の何物でもない。「反抗」では意味をなさないので、「反攻」である。同音異義語の変換ミスは、これからの新聞で続出することであろう。特に、「見出し」は盲点であり、とんでもない所にとんでもない誤植が発見できる場合もある。

わたしもこれまで十七冊の単行本を上梓したが、書名と著者名のミスだけはないように努めた。『みだれ髪』の著者名が「鳳晶子」でなくて「昌子」となっていたのは有名なエピソードである。わたしも、苗字を「島田」にされかかった妻も、『徒然草の内景』という単行本の製作最終段階で、表紙カバーの見本を見せてもらったら『徒然草の内幕』となっていたのを発見し、急遽訂正を申し入れたことがある。

【一九九九年八月二十七日・朝日新聞・夕刊・17面】

「時の贈り物」という欄に、作家・車谷長吉氏のインタビューが載っている。現代文学者の中で、車谷氏は特異な位置を占める。そのインタビューなので、興味を持って読んだ。その導入部。

転落の経験を土台に、白らの人生を切り刻むようにして言葉を紡いできた。初の短編集が出るまで苦節二十年。無情で壮絶な「生」を見つめ続けた私小説作家はしかし、思いのほか冗舌であった。

「無情」の部分は、「無情」と「無常」とをよく変換ミスするが、ここは意味

的に「無情」で大丈夫である。句読点の打ち方としては、最後の部分が、

私小説作家は、しかし、思いのほか

と、「しかし」の前後を読点（・）で挟むのが自然であろう。

問題は、しかし、句読点ではなく、「冗舌」という日本語である。「寡黙」（かもく）の反対語としての「じょうぜつ」ならば、「饒舌」が正しい。ところが、「饒」の漢字は、常用漢字表にない。この文章がインタビューではなく、車谷長吉氏の個人名での寄稿であったならば、高度の文学的文章として扱われ、常用漢字表以外の「饒舌」と印刷したうえで「じょうぜつ」というルビが振られたはずである。ところが、インタビューは一般記事なので、「じょう舌」とするしかない。そこで、新聞業界は、国語辞書に掲載されていない「冗舌」という日本語を造語したのではなからうか。確かに、「冗漫」という日本語と「じょうぜつ」という日本語の意味的距離は近い。

「冗舌」は、常用漢字表の規制を逃れるための苦し紛れの新語なのだと思う。わたしは、このようなやり方に強く反対する。朝日新聞の若い読者は、数年後自分が文章を執筆する立場になった際には、「饒舌」という正しい日本語の存在を忘れてしまっているのではなからうか。

【一九九九年八月十九日・朝日新聞・夕刊・1面】

「素粒子」欄。いつも、短い字数制限の中で、ウィットと風刺に富む文章が盛り込まれていて、感心している。その全文。

十数年ぶりのソウルでした。八月十五日の「解放」の日、景福宮（朝鮮総督府跡）で、正午を待った。

強烈なロックのリズムが耳をつんざく。広場には巨大な便器の前に立つ下半身だけのジーンズ像。若者芸術祭のまつただ中で、炎天下、ただうずくまって時間を過ごした。

ポップアート世代だ。しかし友人はみな「軍人」だった（李静和『つばやきの政治思想』青土社）。彼ら、徴兵を待つ者たちでもある。

これはこれで、熱気を感じられる文章であり、自分の感じた感動を是非とも読者に分有してもらいたいという意気込みが感じられる。ただ、「でした」という丁寧体と、他の「待った」「過ごした」「でもある」という常体との混同が、いさ

(1999年12月)

さか気になる。違和感を感じさせる、ということだ。「十数年ぶりのソウルだった」では、いけないのだろうか。それで衝撃力が薄いと判断したら、「ソウルは、十数年ぶりだった」などの感動を高める表現を工夫すべきだろう。

むろん、「です・ます調」と「だ・である調」とを混用しないことだけを考えると、死んだ(心の籠もっていない)文章を書き綴るのは困ったものである。けれども、この日の素粒子の書き出しは、やや唐突と感じざるを得なかった。

【一九九九年八月十九日・朝日新聞・朝刊・14面】

某一流住宅メーカーの全面広告である。ここにも、文体の著しい混乱がある。ついでに言えば、はなはだしい「視点の混乱」がある。途中を省略しつつ、引用しよう。

夏の陽がようやく西の山の端に接しようとしている。わが家が柔らかな橙の光に包み込まれはじめる。(中略) この家の重厚感が最も情緒豊かに醸し出される時です。私は妻と家の前を流れる川に向かいまで散歩にでる。(中略) デザイナーズ・ブランドの浴衣を纏った妻を見て、ふと気がつきました。そう、懐かしくも新しいもの。私と妻の家、グルニエ・ダインJX。

「いる」「はじめる」「でる」という常体と、「です」「ました」という丁寧体とが、これほど混乱している文章は珍しい。

この文章は、次の段落では「私」の視点ではなく、この住宅を「私」と「妻」に提供した住宅メーカーの視点で語られる。そこでは、「です・ます」で統一されてはいる。ただし、前の段落の「私」は跡形もなく消えてしまう。これを、「視点の混乱」という。

作文の基本は、「文体の統一」と「視点の統一」であろう。だからこそ、例えば「空は悲しいまでに青かった」という文章を読む人間は、「誰が空を見て悲しいと思ったのだろうか」と考えつつ文章を読解し、誰の視点で文章が構成されているかを精妙に読み取るのである。

むろん、そこからはみ出すのが「個性」というものであり、それを画一的に型に嵌めるべきではなからう。出版社のロビーで、ある研究者が辞書編集者と口論しているのを聞いたことがある。編集者が「辞書なのだから、文末は『である』で統一してほしい」と言ったのに対して、辞書の執筆者とらしい(おぼしい)その研究者が、「常体であればよいので、すべて『である』と統一する必要はない。『だ』『と言われる』などの多様な文末を許容すべきだ」と反論してい

た。これは、研究者の弁に理がある。ただし、同じ辞書の中で、「である」と「です」とが混在していたら、その辞書は辞書の体(てい)をなさないのであろう。辞書編集者は、「文体の統一」ということの意味を知らなかったのである。さらに、一流の文学者の場合には、「である」と「です」の混在さえ許されることがある。けれども、それは当面の問題ではない。

この全面広告は、結果として、読後に思わず眩暈(めまい)を起こしてしまいそうな疲弊感の残る文章であった。

【一九九九年八月十六日・朝日新聞・夕刊・1面】

再び、「素粒子」欄。コラムの末尾に、俳句が引用されている。

△夏の川音の向ふは流れけり▽ (橋本渡舟)

これは、素粒子の筆者の責任ではないが、仮名遣いがまちがっている。A地点からB地点へと「向かう」時には、動詞「むかふ・向かふ」が正しい「歴史的仮名遣い」である。ところが、「川の向こう側」という時の正しい歴史的仮名遣いは「向かう」である。「か」は、送り仮名として省略されることがあるから、

△夏の川音の向うは流れけり▽ (橋本渡舟)

とあるのが、正しかった。歴史的仮名遣いを用いる歌人と俳人の中には、中途半端な「歴史的仮名遣い」の知識で、作品を創作する人がいる。「向ふ」と書いた方が「俳味」が出ると考えたのであろうが、それと「まちがった歴史的仮名遣い」を用いてもよい」ということは別問題であろう。

各種の歳時記でも、誤った歴史的仮名遣いを用いた作品は、「正しい歴史的仮名遣い」に書き直したうえで収録すべきではなからうか。それが、日本語の混乱を抑止する一つの方策である。少なくとも、読者の混乱はなくなるだろう。

【一九九九年八月十二日・朝日新聞・夕刊・4面】

指揮者・ヘルベルト・フォン・カラヤンの没後十年の追悼行事として、オーストリアでモーツァルト「レクイエム」が奉納されたという記事がある。音楽ジャーナリスト山崎睦氏の寄稿である。その見出しに、

敬謙に没後10年のカラヤン追悼

とある。本文にも、

感情のたかぶりを抑えた、ひととき敬謙な演奏だ。

とある。「けいけん」は、「敬虔」に決まっているではないか。なぜ、「敬謙」な

どという、不自然にして奇妙奇天烈（きみょうきてれつ）な「熟語」を捏造（ねつぞう）するのだろうか。

やはり、「元古」と同じ事情で、「虔」の字が常用漢字表に入っていないからであろう。「謙譲」という日本語があるので、「謙」でも「虔」の代用が可能だと、新聞業界（ないしは朝日新聞内の用語用字検討会議）の話合いで決められたのであろうか。それにしても、納得がいかないのは、同じ記事の中の「恍惚」「聲咳」「毀譽褒貶」などという常用漢字表以外の漢字を含む熟語には、「こうこつ」「けいがい」「きよほうへん」というルビを振ることで、正しい漢字が用いられている。ならば、どうして「敬虔」という正しい漢字を用いて、「けいけん」とルビを振れなかったのであろう。とても、カラヤンを追悼するという「敬虔」な気持ちにならない記事であった。

ちなみに、わたしの大学・大学院の恩師は、秋山虔先生である。「虔」という字は、戦後しばらく人名には使えないと決められていたが、最近使用してもよいように改められたようである。けれども、「虔」の字は、やはり一般人にはむずかしいのであろうか。ある公立図書館の所蔵目録カードを調査していたら、秋山虔先生の名前が「秋山虎」と印刷されていたのには、苦笑したことがあった。

【一九九九年八月十二日・朝日新聞・朝刊・25面】

「東京むさしの版」である。奥多摩町の山葵（わさび）の紹介記事が載っている。かなり大きな写真が掲載されており、キャプションが付いている。

夏でも手の切れそうな清流に沿って、収穫したワサビを運ぶモノレールが、ゆっくりと進む〓奥多摩町で

「夏でも手の切れそうな清流」の部分は、変である。「夏でも手の切れそうな冷たさの清流」となければ、意味をなさない。これは比喩であり、「冷たい」という感覚を「手の切れそうな」という直喩表現でわかりやすく提示するところに眼目があるはずである。記事本文には、

「この冷たさが、きめの細かい、いいワサビをつくるんだ」

という地元の人々の発言を引用してある。「冷たさ」こそが、キーワードであり、省略不可能の要素なのである。

記者が「夏でも手の切れそうな清流」という舌足らずの表現をしてしまったのは、字数の関係であろう。しかしながら、字数の関係で喩えられるものと喩えるものとの関係が消滅してしまうのでは、元も子もない。

ところで、奥多摩町と言えば、日本画家・川合玉堂の作品を集めた玉堂美術館があることでも知られる。この記事を読む一週間ほど前、わたしは偶然にも玉堂美術館を訪れていた。その際に購入した立派なカタログに掲載されていた川合玉堂の自筆の「変体仮名」の読み方が、驚くほど幼稚なまちがいがだらけだったので、わざわざ正しい読みを手紙で知らせたことがあった。その返事は、今日に至るまで来ない。「まちがいの指摘」は、相手を傷つけないようにしないと、怒らせるだけで終わってしまうという教訓を得た。

【一九九九年八月四日・朝日新聞・朝刊・22面】

全面広告であり、テレビで好評を博した名番組「北の国から」のビデオが全巻発売となったことが宣伝されている。ここには、「北の国から」に寄せる視聴者たちの思いが語られている。その中の一つを、次に掲げる。

「北の国から」を見初めてから北海道の美しさに魅せられています。それから富良野にも何度か足を運びました。（以下略）

「初」と「始」の使い分けは、実にむずかしい。わたしの使い分け基準を、書いておく。「初」の字は、「はじめ」という名詞、「はじめて」という副詞、「…そめる」という動詞の際に用いる。「始」の字は、「はじまる」「はじめる」という動詞の際に用いることにしている。

一流の文学者でも、「初」と「始」の使い分けはさまざまであるから、一概には言えない。「最初に」という意味の「はじめて」に関して「始めて」という表記を採用している文人も、年配の人には多い。さて、問題となっている文章に関して考えよう。「見初めてから」とある。これは、「みそめてから」と読むのが自然である。しかし、この文章を書いた人の意識では、「みはじめてから」と読んでほしいのであろうことは、文意から容易に想像できる。ならば、「見始めてから」と表記した方がよいというのが、わたしの助言である。

「書き初め」（かきぞめ）、「見初める」（みそめる）、「思い初める」（おもいそめる）など、一連の「…そめる」には、「初」を用いる。そして、「始める」「始まる」には「始」を用いると、記憶しておこう。ちなみに、「初」の漢字は「衣偏」（ころもへん）であって「示偏」（しめすへん）でないことを、強調しておきたい。わたしが高校生時代の数学の試験の際に、手書きの試験用紙に「複素数」とあるべき箇所、「複」の字が「示偏（ネ）」になっていたことがあった。挙手して試験監督の数学の先生にその旨申告したら、「そんなことはどうでもよいか

ら、早く問題を解け」と叱られたことがある。決して、「どうでもよい」問題ではないのだが。

【JR東日本・散歩の達人・特別編集版・一九九九年八月四日】

一九九九年八月四日、JRの駅で入手した。武蔵野と多摩のウォーキング・ガイドである。地元に住んでも知らない隠れたスポットを紹介していて、有益である。その中に、武蔵小金井の「滄浪泉園」（そうろうせんえん）の紹介があり、

『武蔵野婦人』の舞台にもなった名園

という表現がなされている。

大岡昇平の名作は、『武蔵野夫人』であって、『武蔵野婦人』ではない。これは、既にそういう作品があるのだから、「夫人」の字を用いるべきである。

一般に、「さふじん」という言葉を採用するときに、「貴夫人」という字を愛用する人と、「貴婦人」という字を愛用する人とが、ほぼ同数ある。どちらかと言えば、「貴夫人」は夫のある人、「貴婦人」は大人の女性という違いがあるのだろう。「既婚者」であるかどうかは女性の本質とは無関係なのだから、フェミニズムの観点からは「貴婦人」の方が望ましいということだろうか。大岡昇平の場合には、「人妻の道ならぬ恋」を描いていたので、「夫人」が採用されたのだろう。

余計なことを書いておくが、二十年以上以前、大岡昇平の名作と全く同じタイトル『武蔵野夫人』で、俗悪な不倫小説が刊行されたことがあった。本の書名には著作権が及ばないことを逆手にとった悪辣（あくらつ）な例であったが、大岡氏の遺族からの厳しい抗議で、『武蔵野令夫人』と改題させられたと記憶している。

【一九九九年七月三十一日・朝日新聞・夕刊・1面】

広告欄に、「朝日新聞社今月の新刊」という宣伝コーナーがあり、雑誌「國華」千二百四十五号の広告がある。その全文を次に引用する。

△特集▽伊勢物語色紙貼付屏風：佐野みどり

サントリー美術館新蔵の本屏風を嵯峨本の前

段階に位置し、光信以降光吉以前室町末期か

ら桃山期の注目すべき佳品として紹介する。

行数と字数の関係で、文章が縮められ、ひずんでしまったことを示すために、

実物通りの改行で示してみた。一読、変な文章である。「國華」は、大変に歴史と権威のある雑誌であるので、このような紹介文は実に残念である。

これを正しい日本語に添削する方法としては、二つあるだろう。一つは、読点（、）の位置を変えるやり方である。

△特集▽伊勢物語色紙貼付屏風：佐野みどり
サントリー美術館新蔵の本屏風を、嵯峨本の前段階に位置し光信以降光吉以前室町末期から桃山期の注目すべき佳品として紹介する。

これでもやはりおかしいことはおかしいので、さらにいじってみよう。

△特集▽伊勢物語色紙貼付屏風：佐野みどり
サントリー美術館新蔵の本屏風を、嵯峨本の前段階に位置する、光信以降光吉以前室町末期から桃山期の注目すべき佳品として紹介する。

二字オーバーであるが、やむをえない。もう一つは、「位置する」と「紹介する」の主語を統一するやり方である。

△特集▽伊勢物語色紙貼付屏風：佐野みどり
サントリー美術館新蔵の本屏風を嵯峨本の前段階に位置づけ、光信以降光吉以前室町末期から桃山期の注目すべき佳品として紹介する。

一字オーバーである。けれども、「サントリー美術館新蔵の本屏風」を「サントリー美術館新蔵屏風」とでも圧縮すれば、何の問題はない。定められた短い字数制限の中で、どこを圧縮し、どこを圧縮すべきでないか、正しく判断できる文章観の涵養（かんよう）が必要だろう。

【一九九九年七月二十七日・朝日新聞・夕刊・9面】

シヨーン・コネリー主演の映画「エントラップメント」の全面広告である。そのストーリーが説明されている部分。

ニューヨークの高層ビルから、レンブラントの名画が盗まれた。その完ぺきな手口から、犯人は美術品専門のプロの泥棒マックだと、保険会社の女性調査員ジンは目星をつける。彼女は、中国の黄金のマスクをえさに、マックをわなにかけることを計画。自ら、マックの相棒となり、犯行の確証をつかむため、彼との接触を試みる。すべてにおいて神妙なマックは、最初はジン

を信用しなかったが、彼女の大胆な行動力と、泥棒の資質を見込んでパートナーにする。(以下略)

まず、「完べき」は、いかにも見苦しい。「完璧」の「璧」が常用漢字表にないからである。しかし、無いなら無いで、「鮮やかな手口」とでも書き直せば「完べき」よりはよほど見苦しくない文章になるであろう。文章構成上の観点から「完璧」という日本語が必須であるならば、「完璧(かんぺき)」とルビを書き加えればよい。「完べき」は、どうにかしてほしい。「完璧」という正しい日本語を新聞や教科書が明示せずに、しかも頻繁に使用するから、「完璧」などという誤字を平気で書く大学生が出現するのである。「璧」は「玉・真珠」、「壁」は「土の塀」、その区別は視覚的に一度教えれば大学生も二度と忘れないだろう。なお、常用漢字表にない漢字を平仮名表記してしまう見苦しさは、大臣が放言によって「ひ免」されたり、「更てつ」されたりしたという記事を読むたびに痛感することでもある。しかし、こちらの方は、「罷免」「更迭」と正しく表記するか、「辞職」と「解任」という言葉で代用するようになりつつあるようである。

次に、「神妙な」という言葉が変である。「慎重な」などとあるべき箇所である。外資系の映画だから、英語で書かれていたストーリーを直訳的に英文和訳したために変な日本語になってしまったのか、「しんちょうな」と「しんみような」との単なる入力ミスなのか、よくわからない。いずれにしても、「神妙な」はおかしい。

【一九九九年七月二十四日・朝日新聞・夕刊・4面】

石原裕次郎主演映画のビデオ販売の広告が載っている。その中に、昭和三十七年の映画「雲に向かつて起つ」の内容紹介がある。

政界汚職を追求する辣腕記者・裕次郎、熱き青春の譜。

まず、小さな点から目くらまらを立てれば、「裕次郎」の次は「読点(・)」ではなく、「句点(。)」が望ましい。

第二に、これが一番の問題点だが、「追求」の使い方がまちがっている。「同音異義語」の変換ミスである。政界汚職は、厳しく「追及」すべきものである。そして、品物を探し求める時には「追求」であり、幸福などの概念を深く探究する時には、「追究」という言葉が使われる。もっとも、「探求」と「探究」もそうだが、「追求」と「追究」の差異は次第に失われつつあるようだ。

ちなみに、社会人の生涯学習機関として、放送大学がある。わたしも非常勤講

師としてスクーリングしたり、卒業論文(専攻特論)の指導に当たったりして、とてもお世話になった。その放送大学には、「人間の探究」という専攻がある。「人間とは何か」という抽象的かつ不可視の問題をじっくりと究めるのだから、「探究」である。にも拘わらず、「人間の探求」とまちがって記憶している学生諸氏が少なからずいたのが残念だった。

【一九九九年七月二十四日・朝日新聞・夕刊・6面】

これは、広告ではなくて、正規の朝日新聞の紙面である。久間十義氏の小説「街物語」が掲載されている。その最後の段落の冒頭部分。

ほおっておくとめどなく喋り続けそうな彼女を見て、秀行が夏背広の内ポケットに手をやったとき、マリ子は顔をあげて立ち上がった。「部長、最後はわたしにイイ女を演じさせてくださいね」

「喋り」は常用漢字表にないので、「しゃべり」と丁寧ルビが振ってある。問題は、「ほおっておく」の表記である。正しくは、「ほうっておく」でなければならない。

この動詞「ほうる」は、歴史的仮名遣いでは、「はふる」と表記した。口語の動詞「放り投げる」は、文語の歴史的仮名遣いでは終止形「はふりなぐ」であった。この「はふる」を、戦後の国語改革に際して「ほうる」と発音通りに表記することとなったのである。けれども、寡聞(かぶん)にして「ほふる」と表記してもよいという決定があったとは耳にしない。久間十義氏というプロの作家の文章だから、新聞社が容喙(ようかい)できなかったのであろうが、こういうところから「日本語の乱れ」は進んでゆくのではないかと危惧(きぐ)する。

ちなみに、歴史的仮名遣いで「はふる」と表記する動詞があった。漢字では、「屠る」と書く。これは、現代仮名遣いでも「ほふる」のまま発音し、そのように表記する。一部、「ほうる」と発音する向きもあるので、「屠る」には「はふる」「ほうる」の二通りの表記が容認されている。むしろ、「ほふる」があやまりであることは当然である。

発音通りに表記する「現代仮名遣い」とは言っても、歴史的仮名遣いを知っておいた方がよい場合がある。一例だけ、あげておこう。「大阪」は、歴史的仮名遣いでは「おほさか」で、現代仮名遣いでは「おおさか」となる。関西で有名な「逢坂」は、歴史的仮名遣いでは「あふさか」で、現代仮名遣いでは「おうさか」となる。

【一九九九年七月二十三日・朝日新聞・夕刊・32面】

不動産の全面広告である。その中の一節。

◎それはアーバンリゾートなアイランド…水辺に佇ずむ銀座のとなり街。

とても雰囲気のあるコピーである。「たたず」と平仮名書きせずに漢字が使っているのも好ましい。ただし、「佇ずむ」の送り仮名は変で、「佇む」が正しい。せつかく、「佇む」という美しい(常用漢字表以外の)漢字を用いることで、高級感を醸成しようとしたのだから、正しく送り仮名を用いてはよかった。

むろん、送り仮名には、あえて細かなことは言う必要はないことも確かであろう。「おこなう」は、「行う」が常用漢字表(教育漢字表にも載っている)の推奨する送り仮名であるが、「行なう」と表記する文学者をわたしは何百人と知っている。「みじかい」は、「短い」が正しいが、「短かい」と書く年配の文学者もいる。「みじかすぎる」とか「みじかめ」などという場合には、「短かすぎる」「短かめ」などと「か」を入れたいと切望する向きもあろう。それは、日本語に対する感受性の問題だからである。だから、「送り仮名」にはそれほど拘泥しなくてもよいのだが、「佇む」の場合はやはり「佇ずむ」とは書かないのが自然であらう。

【一九九九年七月二十三日・朝日新聞・朝刊・40面】

裏表紙のテレビ番組欄である。この日から始まるNHKの新番組「しくじり鏡三郎」を紹介する囲み記事が載っている。その冒頭部分。

上司と意見が衝突して左遷(しくじり)され、ろう番勤務となった鏡三郎

(中村雅俊)の活躍を描く。

「ろう番」は、「牢番」とあるべき箇所だが、「牢」が常用漢字表にないために「ろう番」となってしまった。問題は、ルビの位置である。

上司と意見が衝突して左遷され(しくじり)、ろう番勤務となった鏡三郎(中村雅俊)の活躍を描く。

とあるのが、自然なようにも思われる。「左遷され」とは言っても、「しくじりされ」とは言わないからである。ルビを振る際には、そのままの発音で音読できるように振るのが鉄則であらう。

しかし、少し気になる。「左遷され」は、むろん動詞である。一方の「しくじり」は、動詞「しくじり」の連用形が名詞化したもので、「しくじること、同時に、しくじった者」という意味になっている。だから、「左遷されしくじり」

ではない。意味的には、「左遷しくじり」であるから、新聞の紹介記事はある意味では正しかったことになる。はなはだ面倒である。

どのように書き直せば、完璧(かんぺき)な日本語になるか、代案を示せないが、字数がもう少し必要だということだろう。

【一九九九年七月二十日・朝日新聞・折り込みチラシ】

旅行会社のチラシである。山陰の「足立美術館」の宣伝を、以下に引用してみたい。

横山大観の作品をはじめ、約1200点余りを収蔵。陶芸館には北大路魯山人と河井寛次郎の作品も。一万二千坪の広大な敷地に植え込みと石を配した日本庭園は、四季に描かれるこの美術館のもうひとつの絵画です。

この文章の言わんとするところは、よくわかる。わかったうえで言わせてもらえば、「日本庭園は、四季に描かれるこの美術館のもうひとつの絵画です」の部分は、表現未熟である。まだしも、「四季おりおりに描かれる」となっていれば、許容できたであらう。

【一九九九年七月十九日・朝日新聞・朝刊・1面】

再び、「天声人語」欄の下に書籍広告欄。堀田善衛氏の書籍の宣伝がなされている。堀田氏は「正字体旧字体」の漢字を用いる文学者であった。それで、この広告でも、正字体の漢字が採用されている。

「堀田善衛」という人名、『故園風来抄』という書名、そして『ラ・ロシュフーコー公爵傳説』という書名、という具合に、「衛」「來」「傳」という正字が三つも使われていて、わたしなどは快哉(かいさい)を叫んでしまう。

ところが、である。これが、中途半端なのだ。もしも正字で統一するのであれば、「爵」と「説」の二つの漢字が、新字体である。「衛」「來」「傳」の三つに限って「正字」が使われたのは、この三つがワープロの「第二種水準」に入っている、簡単に打ち出せるからにすぎない。

こういう中途半端な「正字」使用は、著書本体ではなされていないだろうと信ずる。広告だから、電算写植で変換可能な漢字に絞って「古さ」を醸成したのであろうと信じたが、現実には印刷本体もやはり中途半端なのであろう。わたしも、ゆまに書房から刊行中の『塚本邦雄全集』(塚「邦」「全」の三字は正字体)の編集に従事した経験から言うが、電算写植で「正字正仮名」(旧字旧仮名)を

貫くのは、至難の業である。それでも、あえてその試みに挑んだのが、『塚本邦雄全集』であった。その苦難から顧みれば、「正字体印刷」を謳っている出版物のほとんどには「中途半端」の烙印（らくいん）を押さざるをえない。

最近、漢字を正字で用いる若手作家が増えていると仄聞（そくぶん）する。その中途半端さの一覧表を作成して糾弾するというのは、文芸評論以前の「揚げ足取り」でしかないのだろうか。

【一九九九年七月十七日・朝日新聞・朝刊・40面】

裏表紙の番組欄の右上の広告欄。増毛産業の宣伝が載る。この分野では一流企業の商品である。

気になっていた部分が気にならなくなる。画期的な増毛法ヘアフィックス。思い通りのポリウム感が、ごく自然にしかも簡単に得られます。（以下略）

一読して明らかのように、「思いどおりに」の部分に仮名遣いの誤りがある。正しくは、「思いどおりに」である。「道理」は「どおり」、「通り」は「とおり」である。

役所の公文書でも、この「どおり」というあやまった仮名遣いを見かけることがしばしばであり、今に絶えることがない。不思議である。

【一九九九年七月十日・朝日新聞・折り込みチラシ】

某大衆演劇の若手スター（男性）の公演チラシである。その中に、女形の衣装をした美しい写真を掲載したうえで、

生きる博多人形

というコピーが印刷されている。これは、おかしい。あるいは、面白い。

生きた博多人形

とあるのが自然であり、「動く博多人形」でもよからう。「生きる博多人形」はありえない。ありえないが、思わず笑ってしまったところを見ると、あまりにも語感がわたしの持っているものと違ってしまったために、許してもよいように錯覚したためであろう。

【一九九九年七月十日・朝日新聞・朝刊・28面】

青森県の全面広告である。青森県の「スポーツ立県宣言」が高らかに謳われて

（うたわれて）いる。その冒頭の二つの形式段落を引用してみよう。

「人類は、遊戯（スポーツ）をするために生まれてきたのだ」と、オランダの歴史学者、ヨハン・ホイジンガは著書「ホモ・ルーデンス（遊戯人）」の中で述べています。

洋の東西を問わず、日本にもまた、平安時代の後白河法皇が編纂した「梁塵秘抄」の中に、「遊びをせんとや生まれけむ」と、遊び（スポーツ）こそ人間の本质だと看破した今様（流行歌）が収められています。

「梁塵秘抄」には、「りようじんひしう」と正しくルビが振られている。ごく些細な揚げ足取りから始めると、本の書名には「二重カギカッコ（『』）」を用いるというのが、物書きの常識である。「ホモ・ルーデンス」「梁塵秘抄」とするのが、理想である。ちなみに、雑誌名は一重カギカッコ（「」）でも二重カギカッコでもよいとされる。

次に、文章のねじれを見てみると、「洋の東西を問わず、日本にもまた」の部分が、やや表現未熟である。

洋の東西を問わず、日本にもまた、同様の見解を述べたものがあります。平安時代の後白河法皇が編纂した『梁塵秘抄』の中に、…（以下略）

とあるのが、妥当である。あるいは、

これは、洋の東西を問いません。日本にもまた、平安時代の後白河法皇が編纂した『梁塵秘抄』の中に、…（以下略）

と書き直してもよい。文章を二つに分割すべきところを、無理に一文で済ませようとしたりのために、「ねじれ」現象が起きてしまうのだ。

そして、最大の問題点としては、『梁塵秘抄』の「遊び」は、「スポーツ」ではないということである。「遊戯」と「スポーツ」は、概念として完全に重なるものではない。この『梁塵秘抄』の人口に膾炙（かいしや）した歌謡を、「スポーツをするために、わたしはこの世に生まれてきたのだろうか。いや、そうではなからうに」と口語訳してみると、いかに原文と違ってしまうことか。青森県の「スポーツ立県宣言」は立派だが、その宣言のために古典としての『梁塵秘抄』の解釈をゆがめるべきではなからう。『梁塵秘抄』には「遊びをせんとや生まれけん」という今様がありますが、それもあるいは「遊び」スポーツ」という概念に置き換えることも不可能ではありませんまい、などと述べるに留めるのが、「常識」であり「良識」ではなからうか。そうでないと、何も知らない読者は、『梁塵秘抄』にスポーツ賛歌が語られていると早とちりしてしまうことだろう。

【JRパンフレット・やまがた休暇】

一九九九年七月に、JRの駅で入手した。「山伏修行体験塾」の案内がある。「修業」でなく「修行」と正しく印刷されているのは、好感が持てる。『源氏物語』などの古典でも、「おこなひ」とあったならば「仏道修行」の意味である。「修業」は、技術を錬磨（れんま）したりする研鑽（けんさん）であって、宗教的なお勤めではない。

水垢離

「修行」はよいのだが、その中身（中味）でもよい）、という一節がある。これは、「水垢離」の誤植である。「みずごり」と読む。「難」と「離」の誤植は、見た目の類似から発生したものであろう。けれども、現代人で頭から水をかぶることを「水垢離」ということを知っている人は少ないだろうから、「水ごり」と平仮名を交えて表記した方がよかったのではなかろうか。そうすれば、誤植も防げたことだろう。犯人が子どもを「ら致」したり、大臣が「ひ免」されたりするのと、「水ごり」とは別次元である。正確には「ごり」ではなく「みずごり」で一語であるのだが、「水ごり」でも十分に通用する。「ごり」でも一語扱いが可能であり、二字熟語の片一方のみ平仮名に崩すのとは次元が違

【一九九九年六月二十九日・朝日新聞・朝刊・1面】

「天声人語」欄の下に書籍広告欄。行動する文学者として著名な小田実氏が古代ギリシアのロンギノスを紹介しつつ論評した『崇高について』という本の宣伝が載っている。その中に、

小田独自のギリシア文学論、阪神淡路大震災後文学論を同時収録。

という、意味不明の文章がある。「小田自身の」は、「小田自身の」の誤植であろうか。それとも、「小田渾身の」の誤植であろうか。けれども、「同音異義語」でもないし、漢字の見た目が似ているわけでもないし、なぜ「小田自身の」という誤植が発生してしまったのか、よくわからない。

天声人語欄の真下の広告欄は、噂では百万円くらいの費用がかかるとも言われ、出版社が高いお金を払って載せる「ステータス」とされる。百万円出して、正しい情報を読者に伝わらないのでは、「天下の朝日新聞の1面に宣伝をするための宣伝だった」と批判されても、仕方があるまい。

【一九九九年六月二十七日・朝日新聞・朝刊・36面】

裏表紙の「天気欄」。六月下旬の恒例の行事の紹介がなされている。

月末にかけて各地の神社で「夏越の祓い」が行われている。茅輪をくぐって半年のけがれを払い、夏の健康を祈る行事。素朴な伝統行事は、いつまでも大切にしたいもの。梅雨は最盛期に入った。雨の降り方には注意。(天)

「夏越」に「なごし」、「祓い」に「はらい」、「茅輪」に「ちのわ」と、三つもルビが振ってあり、好感が持てる。ただし、ここには「伝統行事」ならではの難問が待ち構えている。

最近、俳句界では「歳時記」を作り直し、旧暦から新暦へと「季語」を移し替える動きが活発化していると聞く。わたしは、俳人ではなく、短歌に携わる人間であるが、このような安易な「新暦対応季語」には強く反対する。

古典では、「一月・二月・三月が春」だから、一月には「新春あけましておめでとうございます」と挨拶（あいさつ）するのである。「四月・五月・六月が夏」だからこそ、『伊勢物語』九段の「五月下旬に雪の降った富士山」が異様なのである。「七月・八月・九月が秋」だからこそ「七夕」の季語は秋なのである。秋の終わりを、「九月尽」（くがつじん）という美しい日本語で表現している。「十月、十一月、十二月が冬」だからこそ、「十月（初冬）」に降る雨を「神無月（かみなづき）の時雨（しぐれ）」と呼ぶのである。この季節感、日本文化の根幹である。自動的に新暦に対応させてよいはずがない。

さて、「夏越（なごし）の祓い」（「夏越の祓え」「みなづき祓え」とも言う）である。六月は、旧暦では夏の終わりであった。「春・夏の汚れを払う」伝統行事なのである。それが、新暦の六月下旬に行われるようになったために、「夏の健康を祈る行事」などという説明がなされてしまったのである。

この天気欄の執筆者に、何の責任もない。旧暦の日付をそのまま新暦に当てはめて実施している現代日本文化そのものが問われている。新暦の七月七日に、天の川が見えるはずはないのに、「七月七日」ということで七夕と称してお祭りをしている。その行き着く果てが、「歳時記」の新暦対応推進であり、日々の生活からの季節感の抹殺なのであろう。

【一九九九年六月二十七日・朝日新聞・日曜版・1面】

紙面の下の部分に、美術品販売の広告が載っている。「源氏物語 茶簞笥揃」のセットである。その茶器には、『源氏物語』にちなむ名前が付けられている、

「みやび」を感じさせる。

蛸、胡蝶、葵、初音、野分、朧月夜、梅枝、若菜下、夕顔

などである。『源氏物語』の研究者の一人として、とても好ましく思った。

ただし、この中で一つだけ他と異なったネーミングがある。それは、『朧月夜』である。その他のすべてが『源氏物語』の巻名に由来しているのに対して、この『朧月夜』のみは人名である。巻名で統一するのであれば、『朧月夜』ではなく『花宴』（はなのえん）とすべきであろうか。

これは、『日本語の乱れ』ではないが、『源氏物語』という日本文化の古典が現代社会でどのようにイメージされているのかを示すために、あえて取り上げてみた。

【一九九九年六月二十五日・朝日新聞・朝刊・2面】

紙面の下部に、書籍の広告がある。橋本治氏の『双調平家物語』の宣伝に、異を唱えたい。この作品の「双調」には、「そうぢよう」というルビが振られている。現代仮名遣いならば、むしろ「そうじよう」だから、歴史的仮名遣いで「双調」の読み方を天下の読書人に示したものと考えられる。

ところが、どの辞書でもよいから「双調」を調べてほしい。歴史的仮名遣いでは、「さうでう」である。「そうぢよう」という歴史的仮名遣いは、この世のどこにも存在しない。

さらに細かなことを言えば、歴史的仮名遣いでは「つ」や「よ」などの促音（そくおん）や拗音（ようおん）は、「つ」「よ」と大きく印刷する。「そうぢよう」ではなく「そうぢよう」などとならねばならない。「そうぢよう」は、あやまちの上にあやまちを重ねている。ただし、カタカナ表記の場合は、「フィンランド」「リッチャレッリ」などと、歴史的仮名遣いでも小さく印刷するのが普通である。

橋本治氏は、東京大学文学部国語国文学科で国文学を学んだ教養人のはずである。だからこそ、『枕草子』『徒然草』『源氏物語』などの現代語訳につづいて『平家物語』の現代語化に挑んだのであろう。けれども、「そうぢよう」という表記を見ただけで、その「文業」の質がある程度推測できるといえるものである。現代仮名遣いでも歴史的仮名遣いでもない、「桃尻式仮名遣い」ということで押し通そうとしているのだろうか。危うき哉（かな）。

【一九九九年六月二十四日・東京新聞・朝刊・1面】

『東京新聞』の初登場である。「花魁ショー」の復活を報ずる記事が、写真付きで掲載されている。むしろ、「花魁」には「おいらん」とルビが振ってある。その中に、次のような一節がある。花魁ショーの復活を喜ぶ出茶屋（ひきでぢやや）の主人の福田氏の述懐である。

（前略）福田さんは、「花魁の幽えんさを体感し、楽しんでいただければ」と再出発にうれしそうだった。

この「幽えんさ」という言葉は、常用漢字表の制限がなければ、どういう漢字が宛てられるのだろうか。すぐに思い浮かぶのは、「幽艶」と「幽婉」という熟語である。「艶」も「婉」も、常用漢字表には入っていない。けれども、「幽えんさ」では、同音で同義の「幽艶さ」と「幽婉さ」の区別が付かない。困ったことである。どちらでもよいということだろうか。読者の判断に任せるということだろうか。

実は、もっと厄介（やっかい）なことがある。「ゆうえん」という発音で、「優艶」および「優婉」という漢字の宛て方もあり、意味は「幽艶」や「幽婉」とほとんど変わらないのだ。おそらく、福田氏は「ゆうえんさ」と語ったのであろう。その「ゆうえんさ」には、辞書で見ると限り少なくとも四通りの漢字の宛て方が可能である。わたしが記者だったら、「優艶」の表記を採用すると思う。それが最も一般的であるからだ。そして、「花魁（おいらん）」というルビを振ったのだから、そして文末に空白部分があるので、「優艶（ゆうえん）さ」と表記したかった。「幽えんさ」だと、「幽玄」とまぎらわしい。あるいは、当日のパンフレットなどに「ゆうえんさ」の漢字が正確に記してあるのだったら、その表記を明記してルビを振ってほしかった。

【一九九九年六月二十日・朝日新聞・朝刊・1面】

例によって、「天声人語」欄の下に書籍広告。仏教関係の図書で、

法然の言葉だった「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という長いタイトルの本の宣伝が載っている。

「なをもて」の部分は、歴史的仮名遣いならば「なほもて」が正しい。『歎異抄』の伝本の中には、発音の関係で、「善人なほもつて」という本文形態もあるようである。「なをもて」という表記の伝本も、むしろあることだろう。しかしながら、現代において「正しい歴史的仮名遣い」を採用するならば「なほもて」

という表記で引用するのが理想的である。

少なくとも、高等学校の古文の教科書では、「なほもて」と印刷されているはずである。その教科書作りの方針をわたしは強く支持し、今後とも堅持してもらいたいと念願するものである。例えば「俳聖松尾芭蕉」の自筆『おくの細道』の原文表記と違っていても、正しい「歴史的仮名遣い」でこの名紀行文は読まれるべきだと考える。

【一九九九年六月十九日・朝日新聞・夕刊・5面】

「ウィークエンド経済」欄に、「ある大学生の奮闘記」という就職活動の紹介記事が載っている。その一節に、志望会社を絞るという場面がある。

(前略) それまでは一月から三百近い企業に、はがきで資料請求したぐらいだった。志望業種を絞らないと追いつけないと思った。

環境問題を勉強したから電力・ガス、金融関係で働く父親をみてきたから銀行や信託、生損保もめざすことにした。いずれも簡単ではない。(以下略) これでも、何とか意味は通る。けれども、読点の「、」と、並列の「、」の区別の配慮がまったくなされていないので、卒読しただけでは正確には意味を取りそこねかねない。こういう時には、「並列」には「ナカグロ」の「・」を用いるとよい。このナカグロを使って、読みやすいように書き直してみよう。

環境問題を勉強したから電力・ガス、それに金融関係で働く父親をみてきたから銀行・信託・生損保をめざすことにした。いずれも簡単ではない。

少しは、意味が明瞭になったのではないか。「電力・ガス」で一グループ、「銀行・信託・生損保」で一グループである。さらに、工夫して、

環境問題を勉強したから電力・ガスを、それに加えて金融関係で働く父親をみてきたから銀行・信託・生損保をめざすことにした。いずれも簡単ではない。

とすれば、もう飛ばし読みしても誤読しようない文章となる。

【一九九九年六月十九日・朝日新聞・朝刊・16面】

全面広告であり、「歌声喫茶」の名曲を集めたCDの宣伝がなされている。その名曲の中に、

真白き富士の根

という曲名がある。むしろ、この「富士の根」という表記も慣用的に許容されている。「尾根」の「根」なのだろう。けれども、なぜか「根」だとイメージが湧

かない。やはり、

真白き富士の嶺

とありたいところである。「嶺」は常用漢字表に入っていないので、そこから「富士の根」という表記が大手を振って跋扈(ばっこ)することになったのである。か。「嶺」を「ね」と読むことは、「高嶺の花」というイデオロムで覚えれば、二度と忘れることはない。無論、「高根の花」という表記も許容されており、それでまちがいはない。ただし、

高値の花

は、「高価な花」という意味での駄洒落としては通用するが、「彼女は我々にとって高値の花である」という言い方は、不可能である。

『伊勢物語』九段に含まれる在原業平(ありわらのなりひら)の歌、
時知らぬ山は富士の嶺(ね) ひとつとか鹿子斑(かのこまだら) に雪の降るらむ

は、「富士の嶺」とあるからこそ仰ぎ見る高山のイメージが沸々(ふつふつ)として湧いてくる。「富士の根」だと、なぜかわたしの視点は大地の下方へと向いてしまふのである。わたしの語感が変わるのだろうか。

結論として、そもその曲名も「真白き富士の根」だったのであろうし、「富士の根」も「正しい」とされているので、将来この曲が音楽の教科書に掲載される場合でも「真白き富士の根」のまま掲載してよからう。けれども、わたしが音楽や国語の教師として学生に教える際には、「富士の嶺」という表記を推奨したい。

【一九九九年六月八日・朝日新聞・夕刊・6面】

芸能欄に、「ダンシングベビー」についての読者の質問があり、それに対する解答が載っている。その解答の一部分。

カジュアルな小型車の周りにおむつ姿のベビーが登場。大人の表情といっても、いいふけ顔をしているそのベビーは、スケボーに乗って、くねと踊り出します。

これは、明らかに読点(、)の打ち場所を誤っている。

カジュアルな小型車の周りにおむつ姿のベビーが登場。写真。大人の表情といってもいい、ふけ顔をしているそのベビーは、スケボーに乗って、くねと踊り出します。

「いい（良い）ふけ顔」ではない。文章の流れからは、大人の表情といってもいいふけ顔をしているそのベビーは、スケボーに乗って、くねくねと踊り出します。

とあるのが自然だが、平仮名が何文字もつづくと「といってもいいふけ」の部分に正しく読者は読みづらい。だからこそ、どこかで読点を入れようとして、カーソルの位置を見誤ったのであろう。

【一九九九年六月五日・朝日新聞・朝刊・27面】

スポーツ欄であるが、「ふるさと山自慢」のコーナーに、富山県の浄土山の紹介文が載っている。地元の立山ナチュラリストガイド倶楽部代表の佐藤武彦氏の文章であるので、書かれてある事実は確かであろう。

この文中に、浄土山一帯の見所として、

懺悔（さんげ）坂、祓（はらい）堂

などがあるとされている。地元の人々の発音として、「懺悔坂」を「さんげざか」と呼び習わしているのだろうか。

ところで、「懺悔」という熟語であるが、「仏教では、さんげ」「キリスト教では、さんげ」と記憶するのがよい。同様の例としては、「礼拝」という熟語に関しては、「仏教では、らいはい」「キリスト教では、れいはい」と記憶するとよい。であるから、浄土山の「懺悔坂」も本来は（と言っても明治時代以前であるが）「さんげざか」と呼ばれていたはずである。それがいつのまにか、「さんげ」という発音が全国的に一般化した結果として、「さんげざか」と通称されるようになったのであろう。

この紹介文の「さんげ」というルビは、正しい。そういう発音を現地の人々がしているのだから。けれども、日本語に携わる職業の人間として、「元々は、『さんげ』と清音で発音していたはずだ」と一言贅言（ぜいげん）を弄したくなるのである。ちなみに、「懺悔」の「懺」は、「懺」でも通用している。

【一九九九年六月二日・朝日新聞・朝刊・18面】

スポーツ欄の紙面の下部に、車の宣伝が載っている。「プログレ 第二十三章（開放感）」というタイトルと共に、次の会話が掲げられている。

妻 「窓をあけましょうか。」

先生 「窓を開けて走れる季節って、あんがい短いですからね。」

この前後の「プログレ」なる文章を一切読んでいないので、この二人の人間関係がまったく理解できない。自動車教習所の先生と生徒の会話なのだろうか。夫婦なのだろうか。それにしても、不可解な設定である。そこが、この宣伝の製作者の狙った効果なのだろうか。

さて、問題は「走れる」という動詞である。実は、わたしは昭和三十年代の西九州で人となったのだが、当時の西九州一帯は「ら抜き」言葉群に既に席捲（せきけん）されていた。だから、学校でも、「食べれる」「見れる」が堂々と話されていた。であるから、わたしが教壇に立った時、学生の一人から、「先生の日本語は汚い。教師が『ら抜き言葉』を口にしてよいのですか」と言われて、一瞬何のことだかわからなかったくらいである。

「走れる」は、「ら抜き言葉」ではない。立派な可能動詞だから、許容範囲内であろう。しかし、わたしだったら、自分の書く文章の中に「走れる」という舌つ足らずの口語調の動詞は使わない。口にするけれども書かないというのは矛盾しているようだが、そもそも「書き言葉」と「話し言葉」は別の次元の問題である。「言文一致」の近代運動が、どれほど日本語と日本文学を負相にしまったことか。「言文一致」でない樋口一葉・幸田露伴・泉鏡花などの再評価がなされているのは、実にうれしい。わたしの採用する書き言葉は、

窓を開けて走ることのできる季節って、あんがい短いですからね。

である。これが面倒臭いと感じたり、現実感が喪（うしな）われると感ずる向きは、書き言葉の中で「走れる」などを使ってもよいのだろうか。そもそも、この「プログレ 第二十三章」は、会話体の話し言葉なのだから。しかし、何度も言うようだが、個人的に「ら抜き言葉」に関しては、恥ずかしながら許容範囲かそうでないかの区別がつかかねることが多い。可能動詞との区別も、よくわからない。それで、薬（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹くことにして、わたしは「走ることのできる」「走ることができるといふ回りくどい日本語を愛用しているのである。

【一九九九年六月一日・朝日新聞・朝刊・31面】

社会面の下部に、毎日恒例の「コンサート情報」が掲載されている。最近突然に人気が出たピアニストに関する広告である。

イングリット・フジ子・ヘミング

弧高のピアニスト

「弧高」は、むしろ「孤高」の誤植である。不思議なのは、どんな安いワープロでも「ここう」と入力して「変換キー」を押せば、「孤高」という漢字が出現するはずである。絶対に、「弧高」という変換は出ない。にも拘わらず、こういう誤植があるというのが、不思議でならない。

かつて、活版印刷の全盛時代には、職工さんが手で活字を拾っていたので、「弧独」とか、「日本は孤状列島である」「円孤」などの誤植が頻繁に見られたものである。今回の「弧高のピアニスト」の誤植は、古典的な誤植であった。

余計なことを書き添えておく。「子」という字は、かつては片仮名の「ネ」と同じ用法で用いられることがあった。「イ子」(いね)さんとか「カ子」(かね)さんという名前の老女が、隣近所に必ずいたものである。「カ子子」だったら「かねこ」さんである。わたしも、このピアニストの名前を最初に見た時に、「イングリット・フジネ・ヘミング」と読んでしまった。

「子子子子子子、子子子子子子」という漢字の連鎖を見て、「ねこのこのねこ、ししのこのこじし」(猫の子の子猫、獅子の子の子獅子)と読解した賢人がいたというエピソードは名高い。「子」という字は、「ね」「こ」「し」などとさまざまに発音する。

【一九九九年五月三十一日・朝日新聞・朝刊・1面】

「天声人語」欄である。わたしは、現在の「天声人語」の書き手を高く評価している。必ずしもその思想信条に共鳴するからではなく、執筆者がしつかりとした日本語を書いているからである。直前の「天声人語」の書き手には、正直言つて、よい印象は持っていなかった。というのは、ネタ(種)を逆に読んだ隠語に詰まると、架空の「Aさん」と「Bさん」を勝手に登場させて、「いやはや、驚いたね」「何が」「今の国会さ」という具合の安直な文章を、歴代の書き手が営々と伝統を築いてきた天下の「天声人語」に臆面(おくめん)もなく発表して恥じる気色がまったくないようだったからである。

レポートや試験答案の基本は(当然、学術研究と文芸評論の基本は)、「です・ます」の安易な文体を避けて、「だ・である」というしつかりとした文章で論理的な文章を構築することにある。文芸評論家の中村光夫がその死後に急速に忘却されつつあるのは、何よりもその「です・ます調」の文章への低い評価に原因が求められるのではないかと。ところが、現在の「天声人語」には、「Aさん」と「Bさん」は一度も顔を出さない。この一点を取っても、わたしは今の「天声人語」

のプロ魂を感じるのである。

さて、ここは珍しいが、「天声人語」への不満である。「最近のことばから」と題して、印象に残った言葉が列挙されている。その中の一人の発言。

参院法務委員会の福島瑞穂委員(社民)。「こんな例えはどうだろう。すべての人の所持品を検査するようになれば、犯罪は減るだろう。でも、そんな社会に住みたいと思うだろうか」

「例え」の部分に、ひっかかるのである。「たとえ」という時には、「例えば」という漢字を用いるのがよい。しかし、「たとえ話」とか「たとえ」という場合には、「喩」の漢字を用いるべきではなからうか。「比喩」という意味なのだから「喩」以外でも、「譬」というむずかしい漢字もある。どちらにしても「常用漢字表」に載っていないので、「喩(たとえ)」「譬(たとえ)」というルビ付きとならざるをえない。ルビを厭うのであれば、「たとえ」と平仮名にするとよい。

【一九九九年五月三十日・朝日新聞・朝刊・16面】

全面広告であり、「もうすぐ梅雨 水害に備える」という紙上座談会が掲載されている。その中の、伊藤和明氏の発言。

日本の治水の歴史は四世紀の仁徳天皇時代からありますが、急速に進んだのは戦国時代。諸公が自分の領土を富ませようと治水工事に取り組んだ。(以下略)

「四世紀の仁徳天皇」に関しては、歴史的事実として真実かどうかの異論もあるので、「『記紀』の記述によれば」などと一言補足しておくのが無難ではある。「『記紀』の記述を重要視することと現実のものとは認定することとは次元がやや異なる。

しかし、問題は「戦国時代の諸公」という言い方にある。「諸公」は、身分の高い人という意味である。ところで、「諸侯」という言葉があり、これは「領主、特に江戸時代の大名」を指す。戦国大名は、「大名」ではあるけれども、天子から任命された訣(わけ)ではないので、厳密な意味では「諸侯」ではない。ただし、「諸公」よりも「諸侯」の方がより適切であるとは言えよう。「大名」諸侯である。

「諸侯」の「侯」は、常用漢字表に載っている。「諸侯」と並んで「王侯貴族」は、歴史学習上の必須知識であるからだろう。ならば、「戦国時代の諸侯」で何の問題もないはずである。

かつて、活版印刷の時代、原稿で「候」という漢字を用いていても（例えば、蛇の恩返しで有名な「隋侯」の故事を紹介したり、「サド侯爵」に言及したりする時など）、必ず印刷所から回ってくる初校ゲラでは「候」となっていたものである。「候」は、氣候・天候の「候」であり、大名の「候」とはまったくの別字である。まったくの別字だからこそ、その違いを一度覚えたら忘れない。

【一九九九年五月三十日・朝日新聞・朝刊・1面】

「天声人語」欄。舞台「午後の遺言状」で登美江役を好演した朝霧鏡子さんの死が追悼されている。その中で、朝霧さんが役者として工夫を怠らなかったことを称賛する部分がある。

最後まで工夫を怠らなかった。たとえば夫との死を前にして、登美江が「あの海にはいりたい……」とつぶやく場面がある。初日からしばらく、朝霧さんは「あの海にはいりたい……」と、途中でちよつと間を置いた。それでは感情過多だと、公演なかばからは、間にもならないような間を置いたただけで、続けてしゃべるように変えた。

なるほどと思われる工夫であり、役者の腐心が偲（しの）ばれる（「忍ばれる」ならば常用漢字表に入っているが、わたしはどうしても「偲」という漢字を用いたのでルビを振る）エピソードである。

ただし、「夫の死を前にして」の部分が、舞台のストーリーないし内容を知らない読者には意味が通じにくい。というのは、「夫との死」のままだと、「夫との二人での死」という意味にも取られかねないからである。ここは、

夫との死別を前にして、とある方がより適切であろう。けれども、夫が先に死んで自分が生き残るのか、夫を残して自分だけ死なねばならぬ運命なのか、はっきりしない。作品の内容を知らない読者に、短い字数で場面を要約することは至難である。そのことを痛感させられた。

【一九九九年五月二十九日・朝日新聞・夕刊・15面】

片隅に、洋酒メーカーの広告が載っている。毎回、有名人にウイスキーについての思いを語らせている。今回は、漫画家の大和和紀氏。

真面目な友の不倫の話。妻子あつての自分を通し、別れた人も今は幸福な結婚をしていると言う。いい女性といい恋をしました。「山崎」をそつと注ぐ。

「真面目」には「まじめ」とルビが振ってある。「注ぐ」には、ルビがない。厳密には、「つぐ」というルビが必要である。「注ぐ」の読みとして、常用漢字表で認められているのは「そそぐ」だけだからである。今、「認められている」と書いたが、「認める」は、「みとめる」と「したためる」という二つの訓読みが可能である。「手紙を認める」と書くときでも、「てがみをみとめる」と誤読されないように、「したためる」とルビを振るのがよいだろう。ただし、この文章は、正規の新聞記事ではなく、私企業の「宣伝文」であるし、洋酒メーカーにとって「注ぐ」を「つぐ」と読むべきことは当然なので、ルビは省略されているのだろう。

閑話休題（かんわきゅうだい、それはさておく）。この大和氏の文章は、複雑な人間関係が凝縮されていて、実に意味がわかりにくい。先程の「天声人語」以上である。おそらく、大和氏は「長編漫画」を得意としているのだろう。「源氏物語」に題材を得た『あさきゆめみし』は大長編漫画であった。こういう短文の中で、長編作品を構成するのにふさわしいロマンチックな人間関係を設定し、そこから何がしかの教訓を抽出し、なおかつそれを「酒」と関連させるのは、ほとんど無理な話である。

「ずっと人間関係が頭に入ってくる」と考える読者も、いることだろう。筆者の大和氏は女性だが、「真面目な友」とは男性の友、「別れた人」はその男性の交際していた女性、「友」は「妻子」の方を愛人よりも重視して、結局は離婚しなかった、これで何の問題もないではないか、と。けれども、やはり字数不足である。この文章のままで正しい理解に到達できた読者は、よほど「不倫物」のドラマ・小説・漫画に毒されているのではなからうか。一般人にとっては、容易ではない。「自分を通し」の「通し」が、特によくわからない。こういう文章を、「心あまりて詞（ことば）足らず」と言うのであろう。

【一九九九年五月二十七日・朝日新聞・夕刊・3面】

最近亡（な）くなった人を追悼する「惜別」欄。美濃部都政を支えたブレイン・小森武氏の追悼記事が載っている。社会部の氏岡真弓記者の執筆。その一節を引用する。

湾岸戦争のころ、肩を震わせて珠子さんに話した。「世界戦争が勃発したら万難を排して阻止する」。そして言った。「明日世界が減じようと、自分はリンゴの木を植えるだろう」

「勃発」には「ぼつぱつ」というルビが振ってある。それにしても、感動的な逸話である。胸が熱くなる。その感動は、「明日世界が滅びようと、自分はリンゴの木を植えるだろう」という言葉によってもたらされる。ところで、この言葉は小森氏本人の言葉だろうか。いや、そうではない。歌人・寺山修司の『空には本』（昭和三十三年）の扉に、次のような言葉が記されている。

もし世界の終りが明日だとしても

僕は林檎の種子を蒔くだろう

どんなときにでも、

しなければならないことは……

ゲオルギウ

これは、昭和二十五年に翻訳されてベストセラーになったゲオルギウ『二十五時』からの引用だと思われる。「ゲオルギウから寺山修司へ」、そして「寺山修司から小森武氏へ」という二重の影響関係を想定しないと、この小森氏の発言に込められた真意は読者に伝わらない。

朝日新聞の記事の表現自体に、文句を言っているのではない。有名な言葉は、誰（だれ）がその言葉を最初に口にしたのか、そして誰がその言葉を現代知識人の心に染め付けるのに最大の功績があったか、そして誰がその言葉を現実世界を生きる指針として実践しえたのか、順番を明記する必要があるとわたしは考える。最小限度、

そして、ゲオルギウの言葉を口にした。「明日世界が滅びようと、自分はいらんゴの木を植えるだろう」という手直しは必要であろう。

【一九九九年五月二十五日・朝日新聞・朝刊・21面】

スポーツ欄。「スポーツ百年物語」という連載読み物があり、毎回なかなか面白い。今回は、「柔道初の女子黒帯」。小崎甲子（かつこ）の人生が紹介されている。その一節。

しかし小崎は精進を続け、二十五歳で念願の黒帯に。「YAWARAちゃん」こと田村亮子（トヨタ自動車）らに続くことになる女子柔道の第一歩を

一読、何の問題もない文章である。意味も通るし、文法的にも、まちがいはない。ただし、「田村亮子らに続くことになる第一歩」の「続く」の主語は、「第一

歩」という無生物であり、やや英文和訳調のなじみにくい表現ではなからうか。そこで、代案。わかりやすく人間を主語として書き直そう。

しかし小崎は精進を続け、二十五歳で念願の黒帯に。「YAWARAちゃん」こと田村亮子（トヨタ自動車）らが続くことになる女子柔道の第一歩を

した。たった一字、「に」を「が」と変えたただだが、日本語としてはこちらの方が自然ではなからうか。「無生物主語」は、まだ日本語として根付いてはいないのではなからうか。「てにをは」の問題は、むずかしいし、微妙である。

【一九九九年五月二十日・朝日新聞・朝刊・15面】

社会欄である。「元ホームレス、70歳の富士森さん」が「路上の目線」で「二〇〇〇首の歌」を作ったという記事が載っている。短歌に関わっているわたしとしては、短歌を必要とする精神的基盤が今でも存続していることを確認できて、とても心強かった。さて、そこで紹介されている短歌作品を紹介しよう。

忘れいし葉代りの漱石の札一枚ひと夜の酒に費へて了る

すごい字余りであるが、「漱石の札一枚」が「五七七七七」の第三句の「五」音の字余りなのだろう。あるいは、作者は無理を承知で「漱石の札一枚」を「ふだいちまい」と読んでほしかったのかもしれない。しかし、これは、無理筋である。

さて、紙面ではこの歌にルビが二箇所振ってある。「しおり」と「おわる」である。ここで注意しなければならないのは、「葉」は歴史的仮名遣いでは「しをり」、「了る」は「をはる」ということである。朝日新聞の方針として、「投稿短歌欄」を一読すれば明白なように、短歌の場合は、「本文」も「ルビ」も可能な限り「現代仮名遣い」で表記したい（させたい）という強い意向が存在している。そのこと自体が問題だと思うのだが、「本文」も「ルビ」もどちらも現代仮名遣いに統一されている限りはあやまりではない。

ただし、本文が「歴史的仮名遣い」で書かれている場合でも、常用漢字表にな漢字に関して、朝日新聞は「現代仮名遣い」でルビを振るという方針なのである。これは、朝日新聞だけでなく、他の「良心的」とされる大出版社も同様である。明治時代に書かれた本文が歴史的仮名遣いの文語文に、ルビだけ現代仮名遣いで振ってあるというのは、わたしにはとても耐えられない。眩暈（めまい）がしてくる。しかし、それが現代文明をリードしている出版ジャーナリズムの「不

「文律」であるのなら、異を唱えつつも指弾するわけにもいかない。

ただし、本文が歴史的仮名遣いで、ルビが現代仮名遣いという「不統一」な表記がもたらしたものは、何であつたかをとくと凝視してほしい。何でもチャンポンの仮名遣い表記は、短歌に志す人々の「仮名遣い」に対する尊重・尊敬の意識を奪い去つたのである。富士森氏の作品を、もう一度引用する。

忘れいし栗代りの漱石の札一枚ひと夜の酒に費へて了る

作者は、「本文」を「歴史的仮名遣い」で書くかと思つていいのか、それとも「現代仮名遣い」で書くかと思つていいのか。「費へて」という部分は、歴史的仮名遣いである。現代仮名遣いならば、「費えて」となる。では、歴史的仮名遣いかと言えば、「忘れいし」の部分は現代仮名遣いである。歴史的仮名遣いならば、「忘れぬし」とならなくてはならない。結局、現代仮名遣いでもなければ歴史的仮名遣いでもない、どこにもない架空の言語が現代短歌の世界に蔓延しているのである。富士森氏の作品を、もう一首。

たまさかにシャンソン聴かむと店に佇つピアノ流れる新宿の夜

「聴かむ」は、歴史的仮名遣いである。ならば、先程の作品でも「忘れぬし」と表記すべきだった。この「たまさかに」の歌について、さらに日本語の混乱を指摘しようか。

「聴かむ」の「む」は、歴史的な文語文法で使われる推量・意志の助動詞である。現代の口語文法では「う」である。「聴こう」というのが、口語文法。それに対して、「ピアノ流れる」は口語の動詞の活用形であり、文語文法の活用では「ピアノ流るる」とならなければならない。この歌は、文語と口語のチャンポンとなつた、非在の日本語によって組み立てられていたのである。

わたしは、「元ホームレス」の短歌作品に対して、憤つてゐるのでは毛頭ない。結社を主宰するほどの有名な専門歌人ですら、「歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの混乱」および「文語と口語との一首の中の混在」という事態に直面してしまつてゐるという歌壇の現状に対して、大いなる不安を抱えているだけである。それが、文語の作品に対して、「本文がたとえ歴史的仮名遣いであつたとしても、ルビだけは絶対に現代仮名遣いで振る。それが歴史的仮名遣いに不慣れた現代読者のためである」と信じてゐる言論機関にも責任の一端があるのではないかと、わたしはあえて非力をも顧みず蟬螂（とうろう）の斧（おの）を振りかざしてゐるのである。朝日新聞が重用してゐる歌人・俵万智氏、俳人・黛まどか氏にも、この混乱傾向は顕著である。

【一九九九年五月二十日・朝日新聞・朝刊・21面】

紙面の下部に、雑誌「サライ」の広告が載つてゐる。この雑誌は、わたしのよな中年世代の心を郷愁で満たすよい企画が目白押しである。購入することも、決して稀（まれ）ではない。今回は、「ローカル線の小さな旅」という小企画が組まれている。その中に、

JR山口線（山口県津和野町）

という部分がある。これは、事実上悖（もと）る。「津和野町」は、森鷗外の生まれた所として有名である。「島根県津和野町」のはずである。山口県の小郡市から山口線は山深く入つてゆくから、「山口県」と誤認してしまつたのであろう。「石見人・森林太郎」として死せんと欲した森鷗外が「山口県人」とされてしまつたことを知つたら、さぞかし悲しい思いをすることであらう。

ちなみに、この森鷗外の遺言は著名であるが、「いわみびと」と発音するのがよい。「いわみじん」と発音する旅番組レポーターがいるが、耳障りである。

【一九九九年五月二日・朝日新聞・朝刊・11面】

「朝日歌壇」の欄。この短歌欄が、本文もルビも現代仮名遣いで統一されてゐる点については、既に述べた。その中のある作品。

遠くから見れば形のある雲のごとき言葉に触れずにいたり

二句目の「見るれば」は、「見れば」の単純な誤植であらう。このような読者の投稿で成り立っているコーナーは、作者の名前や作品の表記に「誤字」があつたりすると、投稿者の失望感が実に大きい。

わたしの体験では、最初の著書『御伽草子の精神史』を「ペリかん社」から上梓（じょうし）した時に、書評欄で取り上げてくれたのはうれしいのだが、書名を『御伽草紙の精神史』と誤記されたり、出版社名を「ペリカン社」と誤記されたりした。その心の深傷（いたで）はなかなか癒えなかった。現在わたしが勤務している「電気通信大学」も、しばしば「電機通信大学」とか「東京電気大学」などと誤記されることがある。はなはだ心外であり、不愉快である。そのためか、「電通大」という略称を用いる人もゐるようである。

【一九九九年四月三十日・朝日新聞・朝刊・3面】

紙面の下部に、『遠藤周作文学全集』全十五巻の広告が載る。この全集は、「長篇小説、短篇小説から戯曲、評伝、エッセイまで純文学作品のすべてを収録」す

ることを原則とし、「純文学作品以外の代表作二篇『おバカさん』『わたしが・棄てた・女』も収める」とある。

この広告を見る以前にも、わたしは遠藤周作をはじめとする現代作家たちの「全集」を編集することが困難な作業であることを感じていた。なぜなら、膨大な発表機関に全生涯の間に掲載したすべての文章を網羅する本当の意味での「全集」は、現実問題として不可能だからである。しかも、現代作家は、自分の文業を世に問う決意で発表する意欲・野心作のほかに、軽い好奇心や金銭的事情のために書きまくった（あえて「書き散らした」とは言わないでおこう）文章が多数あり、それらを「全集」の名の下に集成するのは、作家本人にとっても不本意なことだと思われるからである。

遠藤周作は、「狸狐庵主人」の筆名で、膨大な「軽エッセイ」を発表した。一時期、「遠藤周作」は北杜夫と並ぶ「ユーモア作家」の代名詞ですらあった。それを、今般の「全集」ではどのように処理するのか、わたしは大きな興味を持って見守っていた。新潮社が打ち出したのは、「純文学作品」と見なされる小説・評論はすべて掲載し、「純文学作品」と見なされないものは収録しないという不可解な方針であった。「狸狐庵」物は、すべてお蔵入りとなる。数十年後の読者たちは、「遠藤周作」という名前に深刻なキリスト教関係の小説ばかりを書きつづけた真面目な人というイメージを持ち、「狸狐庵」物は古本屋でも入手困難な珍本になってしまうことだろう。わたしは、「狸狐庵」物を評価しているのではない。「全集」の編纂が来（きた）る二十一世紀にはいかに困難になるかを痛感すると同時に、作家本人が自分の生前に「全集に収録すべき作品」を自選しておかねばならぬようになるのかな、と思ったりもした。

それにしても、誰が「純文学作品」と「純文学作品でない作品」とを区別するのだろうか。不思議でならないのは、『おバカさん』と『わたしが・棄てた・女』の二つの作品は、わたしの目には「純文学作品」と見える。いや、「純文学作品」としか見えない。世の中には、「純文学作品」という言葉に関して、何か大きな誤解があるのではないか。

現代では、「文学」というものの概念が揺らぎ、「純文学作品」という不思議な言葉が一人歩きしている。その不当さを、わたしはこれから打破する評論活動を展開したいと考えている。

【一九九九年四月三十日・朝日新聞・夕刊・18面】

全面広告であり、「39（刑法第三十九条）」という映画の宣伝が載っている。そのコピーの冒頭。

これまでの社会の枠組みが崩壊し、あらゆる価値感が揺さぶられている。ま、人間の関心事は自分自身の心の奥底へと向けられている。（以下略）

「価値感」は、当然に「価値観」の変換ミスである。「かちかん」と入力してから「変換キー」を押せば、必ず「価値観」となるはずである。「かち」と「かん」とに二分して入力したのであろうか。

この映画の宣伝の本文では、「一人ひとりが違う価値観をもっている」という正しい変換例が発見できるので、単純なケアレス・ミスということになるうか。大学生のレポートでも、「価値感」という誤字は多い。

「人間観」とか「文学観」など、「観」を用いる熟語は多い。わたしが、個人的に悩まされるのは、「むじょうかん」という言葉を用いる時である。「無常」を「無情」と誤るのは論外だが、「無常観」と「無常感」とはどちらも正しい日本語である。「無常観」は「無常を観すること」であり、「無常感」は「無常であるという感じ」である。その使い分けは、中世草庵文学の研究家でも迷う。ただし、「価値観」は絶対に「価値感」とはならない。

【一九九九年四月二十五日・朝日新聞・朝刊・17面】

「読書欄」であり、関川夏央氏の「本よみの虫干し」が掲載されている。今回は、岩波文庫『日本童謡集』が取り上げられている。

北原白秋の童謡作品が「現代仮名遣い」に改められて引用されている点、「赤蜻蛉」の「蜻」が「虫偏」に「青」という変な略体漢字で印刷されている点については、関川氏の文学者としての信念と朝日新聞の用字法との折衷の結果であろうから、違和感を感じるが、あえて揚げ足取りをしようとは思わない。

ただし、今回の文章には、意味不明の箇所がいくつかあった。まず、その一つ目。

山田耕筰、本間長世など、やはり当時三十代の音楽家が曲をつけたそれら作品群は、不敏にして現在こそ知らないが、少なくとも一九七〇年代までは母親からコードモに口づたえられて、近代日本文化の底流をなした。

「不敏にして現在こそ知らないが」の部分には、まったく意味不明である。これが関川氏の文章でなく学生レポートであれば、「表現未熟」とか「訂正不可能」

などと朱記して学生に返却するところである。また、「口づたえる」という動詞にも、違和感を感じる。「口づたえ」という名詞は、実に一般的であり、自然である。けれども、「口づたえる」という動詞にお目にかかったことは、乏しいわたしの読書経験の中にはない。関川氏の造語なのだろうか。「口づたえられて」という表現を「おかしい」と思い「避けよう」と考えるのが、普通の物書きである。あるいは、普通でない才能の持ち主だからこそ、関川氏は評価されているのであろうか。

外にも二箇所ほど「気になる」表現があるが、引用するのはあと一つだけに留める。

もうひとつの特徴は、母性への強い憧憬で、それはおそらく明治という男性的な時代への反動である。

「憧憬」には、「どうけい」ではなく「しょうけい」というルビが振ってあり、好感が持てる。この熟語は「どうけい」でも「しょうけい」でも正しいのだが、わたしは関川氏と同じく「しょうけい」派である。さて、この一文だが、関川氏の言わんとすることは、わかる。けれども、「おそらく」という副詞は、「である」という断定ではなく、「であろう」とか「ではあるまいか」などという末尾表現を呼び込んでくるのではあるまいか。「呼応の副詞」と呼ばれる基本的な文法上の約束事である。「杓子定規（しゃくしじょうぎ）」に、「おそらく……であろう」という日本語を律義に守りつづけるわたしの方が、おかしいのだろうか。この程度の「破格表現」は許されるということなのか。もちろん、関川氏以外にも、「おそらく……である」「たぶん……なのだ」という文章を書く人はいる。

【一九九九年四月十七日・朝日新聞・朝刊・27面】

スポーツ欄に、「ふるさと山自慢」の一環として、大阪府の「歌垣山」の紹介文が載っている。地元の山岳連盟の広報委員長の執筆であるが、これが「希代（さいだい）の悪文」である。「添削」のしようがない、途方もない悪文である。その全体像を知りたい人は、朝日新聞の縮刷版でこの欄を見つけてほしい。読み終わった後で悪酔いしそうな、珍文奇文である。素人の書いた文章をここまで罵倒（ばとう）するのはわたしの本意ではないが、あえて「美しい日本語の反面教師」として取り上げさせてもらおう。劈頭（へきとう）一番、いきなり読者は面喰（く）らう。

歌垣山の頂に山銘碑と歌碑が、日本三大「歌合わせ」の名峰を語り残す。

この「語り残す」は、尋常ではない。主語は、何なのか。無生物主語の「山銘碑」と「歌碑」の二つなのだろうか、それでも「語り残す」には違和感がある。あえて添削すれば、

名峰・歌垣山の頂には山銘碑と歌碑とが残り、ここが日本三大「歌合わせ」の一つであることを、現代まで語り伝えている。

ともなろうか。気取った文章を書こうとか、むずかしい表現を駆使しようとかいう気持ちばかりが先走りして、しかも書き手に真の意味での「教養」がない場合には、えてしてこういう悪文が出来上がる。さらに、悪文は連峰のように幾重にも重なっている。

能勢の妙見山から北に位置し、里から仰ぐ歌垣の峰は、指呼の近くで登りやすい。ひと汗出るころに登り切れる。山上は男山女山の峰を連ね、最初に北峰へ山銘碑をたずねる。

この「たずねる」の主語は、何なのか。とにかく、「歌垣山」という地元の誇る名山を全国の読者に紹介するためには、何よりも主語と述語がきちんと対応し、「意味の通った」文章でなければならぬ。それがまったく守られていない。読み手を考えない、書き手の自己満足の文体である。この紹介文は、やがて「歌碑」の説明に入る。

一方の歌碑はへくらかきの里に波よる秋の田は としなかひこの 稲にぞありけるゝと記され、夫木抄（ふぼくしょう）は平安貴族学者、大江匡房（おおえのまさふさ）のもの。

この文章を読んだ人は、どう理解するだろうか。わたしは一読して、歌碑に刻まれた「へくらかきの」という和歌は、平安貴族学者（変な言い回し）である大江匡房の編纂した『夫木和歌抄』に記載されているものである、と理解した。そして、『夫木和歌抄』の成立は平安時代ではなく鎌倉時代の末期のはずだが、と不審に思った。『新編国歌大観』を繙（ひもと）いて調べてみると、この文章は次のように書かれてしかるべきであった。

一方の歌碑にはへくらかきの里に波よる秋の田は としなかひこの 稲にぞありけるゝと記され、大江匡房（おおえのまさふさ）の歌である。『夫木和歌抄』（ふぼくわかしょう）に収められている。

おそらく、この文章の書き手は、観光案内かパンフレットかを参考にしたのであろう。それには、

へくらかきの里に波よる秋の田は

としなひこの 稲にぞありける

大江匡房『夫木抄』

とても記してあったのだろう。この説明を鵜呑(うの)みにして、「くらかきの」という和歌が、大江匡房の編纂した『夫木和歌抄』に含まれるものと錯覚したのではないか。もしそうでないとしたら、こういう文章にはならない。『夫木和歌抄』には一万七千首以上が含まれ、その中のわずか数首が「大江匡房」の歌であるに過ぎない。悪文は、まだまだ終わらない。

山銘碑を後に南峰に三角点をたずねる。測量標石を囲むように円形の大理石を敷きつめる。標石を踏まないようにとの大切さを感じさせる。

「もう勘弁してくれ」と頼みたくなるのは、わたしだけだろうか。「たずねる」の主語と、「敷きつめる」の主語は、一体どういう関係にあるのか。「踏まないようにとの大切さを感じさせる」とは、一体どういうことなのか。

相手が素人では腹の立てようもないが、ここまでひどいと、こういう文章の掲載を了承した朝日新聞のデスクにも少々腹が立つてくる。もし、この文章の書き手が部下の新聞記者であれば、デスクから大目玉を喰らうはずである。外部の人への依頼原稿であるために、大目に見られたのであろう。けれども、こういう悪文は突き返して書き直してもらおうのが、正しい処置だったと思う。

書き直せば書き直すだけ、文章はよくなる。これは、わたしの体験からも言える真実である。

【一九九九年四月十七日・朝日新聞・朝刊・21面】

上記の「ふるさと山自慢」と同じ日の別面である。「探究 記者の目」の欄に、河井真帆記者の「スポーツと短歌」という記事が載る。「言葉よ走れ 歌よ跳べ」という文芸的な見出しが踊っている。短歌に携わっている人間として、こういう短歌ジャンルの紹介記事は実にうれしい。ただし、朝日新聞紙上では取り上げられる歌人や歌書の出版社に、ある種の偏りがあるようにも感じられ、やや残念に思うこともないではない。

それはともかくとして、肝腎(かんじん)の歌人の名前に誤記がある。天下の朝日新聞で名前が記されるのは、歌人として無上の光栄であらう。にも拘らず、名前がまちがっているのは、泣くに泣けないのではないか。

いわゆるプロの歌人の作品集の中にも、探せばプロレス詠「大仁田厚・タザーン後藤・天下布武・男樹・鬼神・奇こそ撰なると」(藤原隆一郎)があ

り、失明の危機をおして格闘するボクサー、辰吉丈一郎にささげた「敗北は骨身に沁みてさはあれど仁王立ちせよ黄金の獅子」(福島泰樹)がある。

「藤原隆一郎」は、「藤原龍一郎」の変換ミスである。ワープロで、「ふじわらりゆういちろう」と書いて変換キーを押したら、最初に「藤原隆一郎」が出たのではないか。その後の推敲がなかったわけである。

ちなみに、ある現代流行作家の作品論を執筆していて、気づいたことがある。その作家は、ある「人名の発音」をワープロで変換して、最初に出た人名(最も変換されやすい名前)ばかりを使っているのではないか、という推測だ。まさに大衆性の極致であり、その作品が多くの読者に迎ええられる土壌は、その一般的な名前の付け方にも反映しているのだった。

蛇足。「辰吉丈一郎」は「丈」に「」を打っていたのではなかったらうか。所謂(いわゆる)「正字」である。福島泰樹氏が詠んだ時には、新字の「丈」だったのだろうか。

【一九九九年四月十日・朝日新聞・朝刊・36面】

裏表紙の番組欄である。わたしは、個人の信条として、ここ五年ばかりテレビなるものをまったく見ていない。にも拘わらず、番組欄だけは必ず目を通す。自分よりも二十歳も若い大学生と話すためには、最新のテレビドラマの粗筋に通曉しておく必要があるからである。さて、この日の「映画」の紹介コーナーに、次のような文章があった。

ドク・ホリデイ(朝日 深夜3・55) 七一年、米。ステシー・キーチ。司法執行官のワイアット・アープは、町の民選保安官選挙に勝つために親友のドク・ホリデイに協力を依頼した。ドクはアープと反対派のクラントン一家の抗争は激化し、その渦中に巻き込まれていく。フランク・ペリー監督。

「ドクは」の三文字の位置がおかしい。正しくは、
ドク・ホリデイ(朝日 深夜3・55) 七一年、米。ステシー・キーチ。司法執行官のワイアット・アープは、町の民選保安官選挙に勝つために親友のドク・ホリデイに協力を依頼した。アープと反対派のクラントン一家の抗争は激化し、ドクはその渦中に巻き込まれていく。フランク・ペリー監督。

とならなければならない。あるいは、「ドクはアープと反対派のクラントン一家との抗争が激化したため、その渦中に巻き込まれていく」でもよいが、「主語」と「述語」がやや離れ過ぎである。

ちなみに、「AとBの」よりも、「AとBとの」というふうには、「との」を用いる方が文章は格段にわかりやすくなる。ここも、「アープと反対派のクラントン一家との抗争は激化し」とする方が、理想的であろう。

【一九九九年四月九日・朝日新聞・朝刊・38面】

「第2社会面」である。寺山修司の未発表の歌詞が八編発見されたことが報じられている。寺山修司は、本当に不思議な才能の持ち主だった。紙面には、「時代は追いついただろうか」という小見出しもある。時代の遥（はる）か先を駆けつづけた寺山修司にまだ時代は追いついていないというのが、わたしの印象である。映画『田園に死す』の衝撃は、未（いま）だにわたしの胸に残っている。この特異な才能が、どのような教養（どの程度の教養）を基盤として開花したのか、非常に興味のある問題である。

その寺山修司の未発表歌詞が発見されたというので、興味深く読んでみた。「お墓のバラード」という詩が掲載されている。その写真も、載っている。第二聯（れんり連）を引用しよう。

できれば海のほとり

かもめの声のきこえるところに

二人の名前をきざんで

日づけはあの日

はじめて

くちづけをかわした

思い出の日

「日づけ」は、「日づけ」が正しい。「現代仮名遣い」においても、「日づけ」が正しい。写真で見ても、寺山の筆跡で「日づけ」と書いてある。なぜ、こんな幼稚なまちがいを寺山ともあろう者が犯してしまったのか。その理由を考えるうちに、時代の魁（さきがけ）であった寺山修司も、ある意味で戦後日本の大衆社会の申し子であったという点に気づかざるをえなくなる。

戦後知識人のバイブル（あるいは座右の書）である『広辞苑』で、「日付」の項目を捜してみよう。すると、正しい「現代仮名遣い」の位置である、

ひづけ

の場所には、見当たらない。現代仮名遣いでも歴史的仮名遣いでもない、「発音通りの配列順」に並べられた『広辞苑』には、

ひず（づ）け【日付】

という見出し項目があるのみである。『広辞苑』の「凡例（はんれい）」をきちんと読めば、発音では「ひずけ」、正しい現代仮名遣いでは「ひづけ」ということが誰にでもわかるはずである。しかし、辞書類の「凡例」は読まれない。推理小説の「解説」はよく読まれるのだが。

寺山も、多くの戦後日本人が『広辞苑』を信じたつもりで、実は『広辞苑』の指示内容を誤解して、「ひずけ」と書くのが正しい現代仮名遣いだと錯覚していたのだらう。文化の根源に位置する重要な仮名遣いへの寺山修司の意識の実態は、このようなものであった。あるいは、この程度のものでしかなかった。にも拘わらず、あれほどの異能ぶりを発揮し得たのはなぜなのか。不思議でならない。「ひずけ」と書いて不審に思わない言語感覚、他人から指摘されても「あつ、そうだったの。はっはっは」と笑い飛ばして気にも留めなかったであろう彼の性格。そして、その作品の放つ真実の「前衛性」の不滅の光芒（こうぼう）。寺山修司をめぐる謎が、また一つ増えた。

【都民劇場・音楽サークル・パンフレット】

一九九九年四月上旬に、池袋芸術劇場で入手した。「定期会員募集」の案内である。裏面に、音楽評論家・黒田恭一氏の長い文章が印刷されている。そのタイトルが、不思議千万なのである。

成熟したききてに供される

滋味掬くべきところの多いコンサート

二行にわたるタイトルである。黒田氏の執筆した本文にも、

滋味掬くべきところの多いコンサートになります。

という箇所があり、本文のこの場所から切り出された表現が先程のタイトルとなつたのだと思われる。それにしても、黒田氏は「掬くべきところ」を読者にどのように読んでほしかったのだろうか。そして、黒田氏本人はこの一節をどのように音読しているのだろうか。

正しい日本語は、「滋味掬すべし」（じみきくすべし）である。「掬す」は、「きくす」と発音し、「すくい取る」という意味のサ行変格活用動詞である。どんな漢和辞典を引いても、「掬く」という文字つづきで発音可能な「訓読み」は書かれていない。おそらく、黒田氏は、「きくすべし」を「きくべし」と錯覚しているのではないだろうか。そして、「掬くべし」という漢字を宛てたのだと思われる

る。音楽評論に留まらず、小説をも発表している「成熟した書き手」である黒田氏にしては、信じがたいあやまりであった。

【一九九九年三月二十七日・朝日新聞・朝刊・29面】

電話会社の全面広告である。十二単（じゅうにひとえ）を着た王朝女性の姿と共に、次の文章が載っている。

春はほのほの。

入園、入学、入社など、

やうやう

めでたきことに

電話

ながうなりでも、

ワイドなれば、

いとおトク。

明らかに、『枕草子』のパロディである。原文は、

春は、あけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、

紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

この「細くたなびきたる」の後に、「いとをかし」が省略されている。「春は、あけぼの」を「はるはほのほの」と言い換えたのは、なかなかのセンスである。読者の頭の中では、「春は、あけぼの」と「春はほのほの」とが同じ一連の詩のように重なり合う。その架空の詩において、「あけぼの」と「ほのほの」は脚韻を踏んでいるが、かつてマチネ・ポエティック派の試みた幼稚な脚韻詩がわずかに一音節のみだったのと違って、「二音節」の本格的な脚韻であって、はなはだ感心させられる。

なお、宣伝文の方では、「やうやう」（少しづつ）という副詞がどの動詞を修飾するのかやわかりづらい（「わかりづらい」は誤り）けれども、読点が「ながうなりでも」とあるので、「ながうなる」という動詞にかかってゆくことが判明する。文脈的には苦しいが、パロディだから仕方がない。

本文では省略されている「いとをかし」を顕在化させて、宣伝文が「いととおく」と言い換えたのは、絶妙である。「いとをかし」と「いとお」も、一連の詩として読者の脳裏に意識される。こちらは「三音節」の頭韻である。座布団、一

枚。

「やうやう」という副詞がかかる動詞の所在を、句読点の工夫で明示した努力作として、ここで紹介した。同時に、「押韻詩」というからには、二音節以上の頭韻と脚韻が必要であろうことにも敷衍（ふえん）させてもらった。

【一九九九年三月二十六日・朝日新聞・朝刊・2面】

紙面の下部に、書籍広告がある。直木賞作家・篠田節子氏の『青らむ空のうつろのなかに』という書名が、わたしの目に飛び込んできた。「赤らむ」という日本語はあるが、「青らむ」という日本語はない。篠田氏の「新造語」である。「あからむ」と「ふくらむ」から、連想されたのだろう。

ここから先は、評価が別れよう。まず、この奇抜な新造語を見て心を動かされて本を買うか、それとも買わないか。買った人には、さらに実際に読了してみてもこの新造語が見事に決まっていたと感に堪（た）えるか、それとも題名倒れだったと失望するかの別れ道もある。

わたしは、本を買わなかった。「書店で、手に取って立ち読みしよう」とも思わなかった。「青らむ」は、いかにも無理筋である。

【一九九九年三月七日・朝日新聞・朝刊・40面】

番組欄の右上のコナーに、本の宣伝がある。桐生操氏の『本当は恐ろしいグリン童話』である。その一節。

人殺しの領主の毘にかがったヘンゼルとグレーテル、

復讐の道具として育てられたラプンツェル：

「毘にかがった」は、「毘にかかった」の誤植である。

興味深いのは、この広告では、他の箇所でも「前触れ」には「まえぶれ」とルビを振り、「物語」にも御丁寧に「ストーリー」というルビを振っているのに、常用漢字表に入っていない「毘」や「復讐」にはルビを振っていない点である。

「まえぶれ」とルビを振ったのは、「ささぶれ」と誤読されるのを恐れたのだろうか。「物語」に「ストーリー」とルビを振ったのは、ムードであろう。それでは、「毘」と「復讐」にルビを振ってない理由は何なのか。おそらく、見た目はむしろ

かしい漢字ではあるけれども、漫画などで人々が頻繁に目にしているのでルビなしでも読解可能だと、出版社サイドで判断したのではなからうか。

その通りである。「毘」も「復讐」も、正しく漢字で書ける大学生は少ないが、

ほとんどの大学生が正しく読めるはずである。「常用漢字表」にも、意外な側面がある。

近年、『三国志』の漫画が若者の間で大人気である。そのお蔭（かげ）で、大学生がむずかしい漢字の読み方を鮮明に記憶している。『三国志』に登場する人名を覚えた結果である。

ベストセラーになった『本当は恐ろしいグリム童話』について、『御伽草子の精神史』の著書のあるわたしとしても一言言いたいことがあるが、「引かれ者の小唄」めくので、批判的言辭は差し控える。ただ、本当に西洋のグリム童話研究者の誰も気づかなかった「盲点」をこの本が衝いているのであれば、よいのであるが。

【一九九九年三月三日・朝日新聞・夕刊・14面】

大阪で行われた「脳死からの心臓移植」の問題の余波として、「厚生省の通知に誤植」という小さな記事が載っている。

公文書の「誤植」が、脳死判定という微妙で重大な場面にあやまった影響をおよぼした可能性が絶無ではない、という趣旨だとわたしは読んだ。

ただし、この記事の残念な点は、「正しい文章」と「誤植された文章」とをきちんと並列的に明示していないので、「誤植」の影響を論じられないことである。「必要とするか」とあるべき箇所を「必要とするが」と誤植してあるとは報じてあるが、全文（ないし前後の脈絡）がこれでは把握できない。残念である。きちんと報じてあれば、「誤植の恐ろしさ」ということで、恰好（かっこう）の（そして切実な）日本語教材となったと思われる。

翻って、わたしが孜孜（しし）として書き継いでいるこの論文も、誤植を含む不適切な日本語の用いられた部分を抜き出してはその都度論評してきたのであるが、読者に「正しい日本語」と「あやまった日本語」との対比が可能だったであろうか。可能であったと、信じたい。「悪文」非難の文章が意味不明の「悪文」になってしまったのでは、木乃伊（みらい）取りが木乃伊になってしまいかねない。

【一九九九年三月三日・朝日新聞・朝刊・22面】

音楽の全面広告であり、「だんご三兄弟」が「本日発売」になったことを宣伝している。「だんご三兄弟」の生みの親である佐藤雅彦氏のコメントが載っている。

る。その最初の形式段落を引用しよう。

もし、串にささった団子たちが兄弟だとしたら、はたして一番上が長男なのか、それとも一番下が長男なのだろうか、という突拍子もない疑問が、ある日僕の頭の中に浮かびました。もう一昨年も前のことです。僕は、その団子にまつわる疑問を楽しい話にし『クリック』という本の中に収めました。

「串」にのみ、「くし」というルビが振られている。さて、「もう一昨年も前のことです」という日本語は、どうにも変である。「もう二年も前のことです」ならば、まったくおかしくはない。また、「思い返せば、一昨年前のことです」でもおかしくはない。けれども、「もう一昨年も前のことです」だけは、絶対におかしい。

おかしな日本語を用いる人が、圧倒的多数の日本人に支持されたヒット曲の作り手となる。これは、何を意味するのか。変な日本語の方が、一般人には面白いということなのか。大衆は、「正統的な言語世界」ではなく、「新奇な言語世界」を求めているのか。それとも、散文における「変な文章」の書き手であった西脇順三郎が、韻文においては卓越した詩人であったという事実と対応するものなのだろうか。疑問は尽きない。

【一九九九年一月五日・朝日新聞・朝刊・31面】

社会面である。「気象記録 長者番付」という記事が載る。気温や降水量の最高値や最低値の記録が長期間破られないでつづいている番付が、気象庁の手でまとめられたという。この記事の中に、

ただ、長期的に温暖化現象を反映して長寿の記録は低い気温や少ない降雪・積雪、短い日照時間が目立っている。

とある。わたしは文科系の人間であり、きわめて科学的思考（論理的思考）に弱い。それでも、「温暖化現象」によって、「低い気温」の記録が破られにくくなることや、「短い日照時間」の記録が越えがたくなることは、何となく理解できる。だが、「温暖化現象」によって「気温が上がる」と、「雪が降らなくなる」から、「少ない降雪・積雪」の記録は簡単に破ることができるのではないか、「多い降雪・積雪」の記録はなかなか越えられないだろうと考えてしまう。この記事は、このあたりに関する「常識の逆」を説明する一行が欲しかった。「暖冬には雪が多く降る」という話を聞いたことがある。地球温暖化現象の進展と、「少ない降雪・積雪の記録」が長年破られずにつづいていることとの間の因果関係をわかり

(1999年12月)

やすく説明して欲しい。それとも、こんな点にこだわるわたしが、よほどの気象音痴なのだろうか。

【一九九八年十二月十日・朝日新聞・夕刊・2面】

「窓 編集委員室から」という欄があつて、今回は「幹」という署名の編集委員が「澄んだ歌声」というテーマで執筆している。長野パラリンピックの開会式で熱唱したスウェーデン人の歌手のコンサートを聴いたという話である。その文章の中に、

ときには敬謙に、ときには朗らかに歌う。柔らかく澄んだ声が心にしみ通る。感動が広がり、元気がわいてくる。

とある。趣旨はよくわかるが、「敬謙」という漢字の宛て方については、重大な疑義がある。この点については、一九九九年八月十二日付朝日新聞夕刊記事を取り上げた際に力説したので、ここでは繰り返さない。二度も朝日新聞紙上で「敬謙」という用字法を見かけたからには、もはや偶然ではなからう。朝日新聞は「けいけん」という熟語に対して「敬虔」という正しい(辞書に記載のある)用字法ではなく、「敬謙」というあやふやな(辞書に記載のない)創作された用字法を採用する会社としての方針を決めているのだろうか。本当に、それでよいのだろうか。

【一九九八年十一月二十一日・朝日新聞・夕刊・5面】

「ウィークエンド経済」欄に、「ふるさと創生10年の教訓」という記事が載る。長谷川利幸記者の署名がある。「ふるさと創生資金」の一億円にからまる後日譚(ごじつたん)を紹介している。その中に、資金が有効に使われて若者を引き寄せた成功例として、過疎に悩んでいた岡山県作東町が紹介されている。

町での挙式熱を盛り上げているのが、ホテル前にズラリと並ぶ十八棟の新婚専用住宅。町が総事業費二億四千万円で建てたもので、創生資金から八千万円があてられた。

「ウィークエンド経済」の欄にはあるまじき変換ミスだが、「二億」とあるのは「二億」のあやまりである。

わたしが常々不思議に思っているのは、朝日新聞には「訂正記事」がしばしば書かれていて、社としての良識と責任感がそこには示されている。ところが、内容的にまちがいのある場合には「訂正記事」は何度でも出されるものの、

「誤植」を含む「不適切な日本語の使用」に関しては一切「訂正記事」は出されない。まだ、そういうものにわたしはお目にかかったことはない。それでよいのだろうか。乱れた日本語や不適切な用字や誤植などは、読まれた人間に運がなかったというだけで済まされるのかということだ。新聞社としては、当然のこととして校閲のプロが多数いるから、毎日の全紙面を逐一チェックして、膨大な数の「誤植一覧表」を作成しているはずである。それを、どこかで公表する必要があるのではないか。

【一九九八年十一月十六日・朝日新聞・夕刊・14面】

「変換キー」という意味深長なネーミングの欄がある。今回は、「史」というペンネームの記者が、「人の心とは」という見出しでコラムを書いている。閣僚経験のある自民党のベテラン代議士に関する文章である。中島代議士の汚職事件に対する感想を尋ねられたその代議士が、秘書との接し方の大切さを説いたという。以下、その代議士の発言に関する記事が記されている。

「若いやつは人の道というのがわかっていない。この事件でどきつとした議員も多いだろうね」

話は、秘書にとどまらず、支持者との接し方など政治家としての人身掌握術に及んだ。しかし、最後まで政治家のモラルについての発言は、一言もなかった。

「人の心とは」という見出しで書かれた文章の中に、「人身掌握術」はないだろう。「人心掌握術」が正しい。ワイプロでも、「じんしんしょうあくじゅつ」と入力して「変換キー」を押せば、「人心掌握術」という漢字が画面上に打ち出される。「じんしん」だけで変換キーを押すから、「人身事故」や「人身売買」でもあるまいし、「人身」という熟語が登場してしまうのである。

一般的に、「自信」と「自身」の変換ミスは多い。「人身」と「人心」の変換ミスは珍しい。この欄が「変換キー」というネーミングであるだけに、余計この「変換ミス」が目立ってしまった。

【一九九八年十一月八日・朝日新聞・朝刊・33面】

「東京 むさしの」版である。その一角に、「朝日旅行会」の案内が載っている。「箱根の美術館」という触れ込みで、箱根を巡る旅行会の企画が宣伝されている。その目的地の中に、

強羅閑陰宮（旧閑陰宮別邸で昼食）

という、グルメには心躍る一節がある。なかなか、よさそうな企画である。ただし、「閑陰宮」という旧宮家の存在は、寡聞（かぶん）にして聞かない。これは、当然に、

強羅閑陰宮（旧閑陰宮別邸で昼食）

の誤植であろう。「閑陰宮」は、「かんいんのみや」と読む。

旅行関係の誤植という点で、ついでにもう一つ挙げておく。同じ頃JRの駅で入手したJTBエースの観光パンフレット「贅を尽くす宿」に、おいしそうな食事見本の下に「料理別」と印刷されていた旅館があった。他の旅館は、すべて「料理例」と印刷してあったので、わたしにはすぐさま誤植と判明したが、そうでない人にとっては大きな誤解が発生したものと想像される。

旅館に関する「料理別」という表現は、料理代金は別途に必要であるという意味に即断されかねない。印刷されている規定料金プラス食事代金が必要ということで、やむなく旅行申し込みを諦める人もいたのではなからうか。「例」と「別」の漢字が似ているからの単純な誤植なのだろうが、場合が場合だけにこの誤植は致命的であった。旅館は、印刷会社に厳しい抗議をしたかもしれない。

【一九九八年十月三十日・朝日新聞・4面】

紙面の下部に、本の宣伝が載る。その中の一冊に、『レーモン・ルーセルの謎』という書名がある。その内容は、次の通り。

シュルリアリストや瀟澤龍彦、寺山修二らに愛された作家の奇矯な生涯とその創作法に迫る。

紙面では「彦」の字体も「正字」が使われており、瀟澤に関しては細心の注意が払われて校正されたものと見え、四文字とも正字が使われていて、完璧（かんぺき）である。ただし、「寺山修二」の方には、注意が行き届かなかったと見えて、「寺山修司」という名前を書き間違っていた。

なお、「シュルリアリスト」という言葉は、どうなのだろうか。「写実主義」という文学用語は、フランス語では「リアリズム」、英語では「リアリズム」と言うとうたわしは教わった。「シュルリアリスト」は、芸術の領域ではどうなのだろうか。多分それで通用しているのだろうが、念のため記しておく。

【一九九八年十月十七日・朝日新聞・夕刊・12面】

「中島潔の世界」展が開催中であり、その紹介記事が載っている。今回の展覧会は、『源氏物語』に題材を得た作品が中心となっているという。実は、わたしは多忙につき、『源氏物語』の研究者でありながらこの展覧会を一見できなかった。しかし、多数の知人から、この展覧会の会場で販売されていた絵葉書を買ったので、おおよその輪郭は把握できた。今、「把握できた」と書いたが、本当は「つかめた」という表現を漢字を交えて使いたいのである。けれども、現在のワープロでは「手偏」に「国」という略体字しか出力されない。本当は、「手偏」（てへん）に「國」である。「手偏」に「国」の「つかむ」を見たくないの、仕方なしに「把握できた」という表現したのである。

さて、中島潔の世界については、美術評論家・村田慶之輔氏の解説文「追憶の母性、源氏絵に体现」が委曲を尽くしている。その中の一節。

中島は母なるひとの面影を物語の中の女性にたずねている。それが偶然にも、光源氏の亡き母桐壺女御への思慕やそのモデルを求める遍歴のストーリーさながらなのだ。

「桐壺女御」には、「きりつぽのようご」というルビが振ってある。まず指摘したいのは、『源氏物語』のどこにも「桐壺女御」という人物は登場しないということである。光源氏の母親は、「桐壺更衣」（きりつぽのこうい）と言う。天皇の后妃は複数いるのだが、後の父親が大臣であれば「女御」として入内（じゅだい）し、父親が大納言クラスであれば「更衣」という低い身分の后妃とならざるをえない。桐壺帝は、第一皇子を出産した右大臣の娘・弘徽殿の女御（こきでんのようご）ではなく、第二皇子を出産した低い出自の桐壺更衣のみを寵愛する。その愛の必然性を高らかに謳い上げることが、『源氏物語』の巻頭の桐壺巻の意義であった。光源氏の母親が「女御」ではなく「更衣」である点に、この『源氏物語』の開幕の最大の関心事があった。「桐壺女御」では、作者・紫式部が苦心して立ち上げた桐壺巻の開幕が台なしである。

次に、「亡き母桐壺女御への思慕やそのモデルを求める遍歴のストーリー」という表現の意味が、わたしにはよく理解できない。『源氏物語』に書かれているのは、光源氏が母親のイメージを求めて（母親の身代わりとして）藤壺女御を愛するようになり、その藤壺との愛が不義密通であることに苦悩して、その姪に当たる紫の上へとさらに愛を転移させるというストーリーである。「桐壺更衣」への愛が始原的に存在し、それが藤壺への愛で代償され、それがさらに紫の上への

(1999年12月)

愛に転移することである。これを、「母のモデルを求める遍歴」という文章で、表現できているのだろうか。「モデル」という言葉の使い方が、よくわからない。結論として明らかなのは、村田氏が『源氏物語』に関しては素人であるということだ。

こういう解説文は、中島潔氏にとって大変に不利である。おそらく中島氏と個人的な親交があり、かつ中島氏の画業を最も深く理解している美術評論家として、村田氏は登場したのであろう。その村田氏が『源氏物語』に関してこのような理解しか持っていないのでは、中島氏本人も『源氏物語』に関しては村田氏と同じレベルの理解なのだろうと思われかねない。

『源氏物語』の本質は、原文で読まねばわからない。平成の時代にふさわしい『源氏物語』の絵画化も、それに関する芸術評論も、『源氏物語』を原文で少なくとも一度通読した人物の手で試みられるべきである。中島潔氏はそうではなく、原文で通読した上での現代美術化であったと信じていた。これは、祈りである。そうしていただきたい。

【一九九八年九月二十日・朝日新聞・朝刊・32面】

番組欄である。「NHK衛星第一」の番組表の中に、午後十時半から、

追われる巨像 独コル政権の岐路

という番組が予定されている。この「巨像」は、あるいは「巨象」の変換ミスであろうか。巨軀(きよく)の持ち主であったコル政権が総選挙に敗北しそうな状況の中で、この番組は放送された。コル元首相のあだ名はよく知らないが、「追われる」という動詞には、動物の「象」がふさわしい。「巨像」(大きな彫像)という日本語もあるが、その場合には「追われる巨像」よりも、「壊される巨像」などという表現がふさわしからう。

【一九九八年九月十六日・朝日新聞・添付広告特集】

新宿伊勢丹の折り込みの大きな広告である。上部には、「朝日新聞・広告特集」という新聞社名が印刷されている。普通のチラシよりは、格が上なのだろう。そこに、有名な「吉兆」のお弁当の案内がある。

現代懐石を代表する料亭八吉兆のお弁当。穴子南蛮漬、鱒塩焼、松茸土佐煮、車えび、里芋、栗ふくよせ煮、ぎんなん、鯛笹巻きずし、松茸ごはんなどを詰め合わせました。秋の旬の味覚を存分にお楽しみください。

本当においしいそうである。ただし、「栗ふくよせ煮」は、もしかしたら「栗ふくませ煮」の誤植ではなからうか。平仮名の「ま」の字は、同じ平仮名の「よ」という字と大変によく似ている。特に書道を習っているような達筆な人物は、「ま」の最初を「横に二本の棒」ではなくて「横に一本の棒」で済ませてしまう。これが、「よ」と間違われやすいのである。吉兆の人が手書きで弁当の中身を書き出した時に、それが達筆だったので印刷会社の人が読み間違えた蓋然性(がいぜんせい)がきわめて高い。

「ふくませ煮」は、「ふくめ煮」と同じものであろう。

【一九九八年九月一日・朝日新聞・夕刊・1面】

下部に、サントリ美術館「日輪と月輪 太陽と月をめぐる美術」という意欲的な展覧会の宣伝が載っている。その広告文。

蒔絵、

屏風、

茶道具、

楽器、

着物、

甲冑も、

国宝も、

有り。

最後の行は、「あります」と読む。「あり升」とも書き、「升」の中に液体が入っているようすを記号で表している。古い商店の屋号にも使われることがある。ついでながら、わたしは斜線の向きを逆に、□と書く。どちらでもよいのだろうか。どちらが正しいのか、あるいはどちらも正しいのか、不勉強でわたしはよくわからない。

さて、問題は「マス」ではなく、「甲冑」である。これは漢字検定の基本なのだと思うが、「冑」と「冑」とは意味の異なる別の漢字である。そして、「かつちゅう」という際には「甲冑」の字が用いられる。出版社で校正業務に携わっている人に話を聞いた経験があるが、彼は「校正の際に特に注意すべき漢字」を五つばかり列挙した中に、「甲冑」はまちがいで「甲冑」が正しいことを含めていた。それほど、校正者に望まれる基本知識なのだろう。天下のサントリ美術館には、「甲冑」と「甲冑」の正誤を見破る人が皆無だったのだろうか。それと

も、広告代理店にお任せしてあったのか。それにしても、「校正者養成講座」の恰好の事例となりそうな誤植ではあった。

【一九九八年八月三十日・朝日新聞・朝刊・2面】

紙面の下部に、小林よしのり氏の話題作『戦争論』の広告が載る。この本を読んで感動した十九歳から八十歳までの読者の手紙が、合計八通掲載されている。その最後の手紙を、次に示す。

よく勉強していて正論を易しく表はしておりその効果が良く出ている。ユニークな本。類例がない。小林氏の健闘は見上げたもの、平成志士と言ふべきか。(80歳・元会社員)

いかにも八十歳の老人が書きそうな文章である。「表はして」とか「言ふ」などという歴史的仮名遣いが使われていて、古色蒼然、いかにも老人の手紙らしいということとでここに取上げられたのであろう。

ところが、この手紙、二箇所のみ「歴史的仮名遣い」であり、ほかは全部「現代仮名遣い」なのである。

よく勉強していて ↓ よく勉強してゐて

表はしており ↓ 表はしてをり

良く出ている ↓ 良く出てゐる

この三箇所が、現代仮名遣いである。この読者からの手紙は、見事なまでの「仮名遣いの混用」の産物である。八十歳だから、記憶がこんがらがって、このような混乱を呈してしまったのだろうか。それとも、出版社の若手社員が高齢読者からの長文の手紙を短く要約する際に、仮名遣いへの配慮が足りなかったのだろうか。それ以外にも、さまざまな理由が考えられる。

【一九九八年八月二十六日・朝日新聞・朝刊・31面】

社会面である。和歌山毒入りカレー事件が報じられている。二人の男性がある民家で食事した後で体調を崩し、何度も救急車を要請したという内容である。その救急車を呼んだ人物については、

一一九番通報の電話はこの民家の住民の名前を名乗って入ることが多かったという。

と記されている。「名乗って入る」は、「名乗っている」の変換ミスである。ワープロで、「勉強している」「思っている」などという「いる」を含む複合動詞を変

換する場合、「勉強している」「思っている」がそれぞれ一語だと思っていなくても、ワープロの方は「勉強して」「いる」「思って」「いる」などと分解して変換するようである。そのためかどうかはわからないが、「いる」の部分がしばしば「入る」「イる」「居る」「要る」などと変換ミスを起こすことがある。

ちなみに、わたしは個人的に「名乗る」ではなく、「名告る」の方が好きである。ただし、「告る」(のる)という読みは、常用漢字表には入っていない。

【一九九八年八月十五日・朝日新聞・夕刊・11面】

社会面に、「8・15 不戦の誓い重ね」という記事が載る。武道館で全国戦没者追悼式に参加した、高知市の女性の「歌」が掲載されている。彼女の父親が、先の大戦で戦死しているらしいのだが、彼女の詠んだという次の「歌」だけを見て、この歌がどんな状況で詠まれたものなのか、読者は想像できるだろうか。

拝礼を仰ぎ 虻生して舞い 蟹歩み 親子の継を想いし泪

「虻生して」に「あぶおして」、「蟹」に「かに」、「継」に「きずな」、「想いし泪」に「おもいしなみだ」というルビが振ってある。普通と違う「よりむずかしそうな」漢字が使われている。「きずな」には「絆」の方が普通だし、かつ妥当である。「絆」だと「ほだし」と誤読される危険性があるのでそれを避けたのかもしれないが、いずれにしてもルビが必要なことから、「絆」で十分だろう。「想いし泪」も、「思いし涙」の方が自然だし、かつ読者の共感も得られる。あるいは、松尾芭蕉の「行春や鳥啼き魚の日は泪」を引用しているのかもしれないが、あえて難解な表現を用いるだけの必然性は、この「歌」にはない。

そもそも、これは「歌」になっているのか。「八七五八七」という韻律上の破綻(はたん)の点は、あえて問わない。「拝礼を仰ぎ」の「仰ぎ」の主語は、何なのか。「わたし」作者の女性」が拝礼しているのを、虻や蟹が仰ぐのだろうか。「虻生して」とあるが、「おす」という動詞で「出現する」とか「登場する」という意味を表し得るものなのか。「生す」という動詞は見たこともないが、高知の方言なのだろうか。「生る」(ある)という動詞なら古語にあり、「虻生れて舞い」という表現となる。

記事によれば、この「歌」らしきものの背景は、次のように詳しく説明されている。

七月末の命日に、高知市内の護国神社をひとりでお参りした。アブがぶんとまとわりついてきた。石畳に目を落とすと、その辺りでは見たことも

ないカニが歩いていた。父が姿を変えて会いにきたのかもしれない。それを歌に詠んだ。

何とまあ、こんな内容だったのだ。それにしても、「拝礼を仰ぎ」の主語は不明のままである。散文で書かれた意味を読んでも、読者にはこの「拝礼を仰ぎ」というひとりよがりの「短歌もどき」の韻文の意味がまったく理解できない。

一般素人の作った「短歌」を批判するのも、まことに大人げ（おとなげ）ないが、あえて言うておきたい。「終戦記念日」が近づくと、新聞の投稿歌壇には、朝日新聞以外にも一斉（いっせい）に「戦争短歌」が殺到し、多くが掲載される。そこには、戦争と平和、悲惨と幸福に関する重い主張が述べられている。その中身の重さと、「短歌としての優劣」とはまったく無関係である。どんなに貴重な体験であったとしても、「表現」として短歌になっていなければ、それは「読むに堪えない」駄文でしかない。「継」「想」「泪」などという気取った漢字を辞書をひっくりかえして探す暇があるのだしたら、自分だけの体験した独自の神秘的な体験を、「三十一文字」の中に他人に理解可能な表現で定着させる工夫をすべきである。一首で無理なのだったら、連作でもよからう。自分以外の人間に自分だけの思いを「伝えたい」という気持ちが少しでもあるのだしたら、ここで問題としているような歌の表現には絶対にならない。自分だけの思いに陶然（とうぜん）として恍惚（こうこつ）状態になっている場合に、こんな訳（わけ）の分からない歌が出来上がる。「凝縮度が高い」とか、「心余りて詞足らず」とかいう次元ではない。単なる自己満足の道具として、短歌を用いてはならない。用いてもよいが、天下の公器に得意げに発表すべきではない。

【近代日本美術の名作 人間と風景】展・ポスター・東京国立近代美術館

一九九八年八月に入手した。同美術館所蔵の作品によって、戦後の日本美術を総括しようとする展覧会である。その企画趣旨が述べられている部分の一節を、次に掲げる。

それにしても、今や終わりをむかえつつある20世紀は、科学の進歩を謳歌する一方で、二つの世界大戦の惨禍に象徴されるように、はなはだ陰影にとんだ激動の時代でした。（以下略）

「陰影にとむ」というイデオロムの使い方は、これでよいのだろうか。人間の表情や芸術作品などが複雑な起伏に富んでいる場合に、「陰影に富む」というイデオロムが使われる。この文章の場合には、二十世紀文明の「明」と「暗」に着

目しているのが、一見「陰影に富む」でよさそうだが、わたしの語感でははなはだ違和感がある。「陰影に富む」は、物事の二面性あるいは両義性を称賛する、どちらかと言えば「プラス」の価値観ではないのだろうか。

面倒でも、「栄光と悲惨との二面性に翻弄された激動の時代でした」などとあるのが自然ではなからうか。

【一九九八年七月十六日・朝日新聞・朝刊・26面】

スポーツ欄に、大相撲に関連する記事が載る。鈴木芳美記者の執筆であり、

「高根の枅席」

一般客にも機会

という見出しが掲げられている。「たかねの花」のパロディで「たかね（高値）の枅席」と洒落（しゃれ）たのだろう。ところが、一九九九年六月十九日付朝日新聞朝刊の箇所で論じたように、「高根の花」でも間違いはないのところが、「高根の花」の表記の方がよいのではないか。つまり、

「高根の枅席」

一般客にも機会

の方がよくはないかということである。

【一九九八年七月十日・朝日新聞・朝刊・34面】

「俳句甲子園・東京大会 優秀作決まる」という記事がある。その中の一句に、次のものがあつた。

まつさきに 駆け出してゐる 夏帽子

朝日新聞は、投稿短歌に関しては「本文」も「ルビ」も、「現代仮名遣い」で統一しているようである。だが、投稿俳句の場合には、「本文」は「歴史的仮名遣い」（あるいは投稿したままの仮名遣い）、「ルビ」は「現代仮名遣い」という方針を採用しているように推測している。

これは、毎週恒例の投句欄ではないが、一般的な「投稿俳句」だから、「駆け出してゐる」という歴史的仮名遣いがそのまま印刷されているのである。大変に、心強い。ところが、「まつさきに」の部分が「歴史的仮名遣い」ではない。歴史的仮名遣いの場合には、促音の「っ」は「つ」と大きく表記する。だから、

まつさきに 駆け出してゐる 夏帽子

とあるのが、正しい歴史的仮名遣いである。

また、なぜ、「五七五」の各句の間に一字分の空白が設定されているのか、その趣旨がよくわからない。「五」「七」「五」でブツブツと小刻みに区切るよりも、「五七五」を連続して一気に書きおろすのが自然ではないか。区切りは、読者の頭の中でなされればよい。

同じ優秀作の中に、

打水の 沁みて試合の 始まれり

がある。「うちみず」と「しみて」にルビあり。この空白の設定は、明らかにおかしい。強いて区切りを設けるならば、

打水の沁みて 試合の始まれり

でなければならぬ。音読する時も、「打水の／沁みて試合の／始まれり」と読んだのでは、作者の苦心も水の泡である。「打水の沁みて／試合の始まれり」と音読すべきだろう。

百人一首もそうであるが、三句切れでない和歌を強引に「五七五／七七」で息継ぎをすると、芸術としての陰翳（いんえい）がはなはだ失われる。「五／七／五」という俳句の「ぶつ切り」もそれと同じ愚を犯しているのではないか。

まつさきに駆け出してゐる夏帽子

打水の沁みて試合の始まれり

とあるべきだと、わたしは主張したい。

【一九九八年六月二十一日・朝日新聞・朝刊・11面】

読書欄の下部に、本の広告欄がある。その中に、「すぐわかるあなたの犬の知能指数」という書物の宣伝が載る。その一節。

Q 散歩の途中で、自分よりかなり大きな犬や

馬と出会ったら、あなたの犬はどうしますか？

単純な「入力ミス」である。「あなた」とあるべき箇所が「あなた」と印刷されている。これは、ワープロなどの入力の際に、かなり頻繁に起こるミスである。わたしも、よくこのタイプの入力ミスをしてしまう。心したい。

雑談。この「すぐわかるあなたの犬の知能指数」という本は、実に面白そうである。だが、翻訳物である。日本では、犬の散歩の途中で「馬」と出会うことは、まずありえない。こういう場合に、原典をそのまま忠実に和訳するか、日本に似そな大きな動物名に「意訳」して出版するか、判断に迷うところである。わたしは翻訳者であれば、「馬」を消して別の動物名に変えてしまう。

さらに、この「すぐわかるあなたの犬の知能指数」の左枠には、別の出版社の広告が載っている。題して、『★りたつ花』。★のところには、漢字一字で、「草冠」の下に「愛」という字が書いてある。「かおりたつひと」と発音するというこまで来ると、駄洒落ではなくて悪乗りである。写真集であるらしい。「花々とキモノ美人、大正浪漫の香り漂う写真集」というコピーが付載されている。現在、電算写植であるから、少しばかりの手間暇でいくらでも「外字」を作ることができる。けれども、無理な漢字は作らない方がよからう。

【一九九八年六月某日・某コンサートホールにて・音楽パンフレット】

コンサートの入口で、大量の音楽チラシをもらった。その中のいくつかの誤植を紹介しておく。

まず、「ストラディヴァリウス・サミット・コンサート1998 キューピー・スペシャル」。これで三回目となる企画らしい。その開催趣旨の一節。

第2回の演奏会は、10台のストラディヴァリウスが集まり、マスコミを通じて総額70億円とも90億円とも言われましたが、第3回「ストラディヴァリウス・サミット・コンサート1998」は、なんと11台のストラディヴァリウスが、集合します。世界最高のアンサンブルと世界最高の楽器というファイン垂唾の演奏会です。まさに今世紀最後のストラディヴァリウスの響宴です。ゴッホの「ひまわり」の際にも金額が話題となったが、芸術の質は金額では計れないと思う。ただし、ストラディヴァリウスが名器であることは事実である。それが大量に一堂に揃うという、すごい企画である。ただし、この宣伝文にはいくつもの疑問がある。

小さなところでは、「ストラディヴァリウスが、集合します」の読点は、不要である。次に、最後の部分の「響宴」だが、もしこれが「饗宴」のパロディとして「響きの宴」なのだという気取った台詞（せりふ）であるのならば、

まさに今世紀最後のストラディヴァリウスの「響宴」です。

と、カギカッコ（「」）を付して、新造語なのだということを読者に知らしめねばならない。そうでないと、「饗宴」の誤植であろうと、読者は思いかねない。あるいは、誤植か造語なのかと考えもしないで読み飛ばす読者も、多いのではないか。あるいは、音楽業界ではコンサートのことを既に「響宴」という言葉で言い習わしているのだろうか。

第三に、これが最も致命的な欠陥なのだが、「垂唾の」という日本語はない。「垂涎の」という日本語ならある。これは、「すいぜんの」と読むのが正しい。しかし、「すいえんの」とあやまって読む人々が多すぎて、「すいえんの」でも構わないことになっている。けれども、「すいぜんの」と読むのが正しいことは言うまでもない。

「天に唾する」とは言うし、「生唾を呑む(のむ)」とも言うが、「垂唾の」とは言わない。

モンテヴェルディ歌劇「ボッペーアの戴冠」のチラシももらった。「戴冠」(たいかん)は、しばしば「載冠」と誤植されるのだが、これは大丈夫であった。チラシには、このオペラのストーリーが紹介してある。日本の歌舞伎もそうだが、大変に筋が入り組んでいてわかりにくい。けれども、何とかストーリーが要約されている。その最後の部分。ストーリーを無視して、あえて断片だけ切り出そう。ついにオッターヴィア退位の大儀名文を得たネローネは、ボッペーアを皇后に迎え、官能的な愛の二重唱を歌い幕となる。

最後のところは、「官能的な愛の二重唱を歌い、幕となる」というふうには、読点を打つとわかりやすくなる。

最大の問題は、「大儀名文」が「大義名分」の誤植だということである。「大義名文」という一字のみの誤植はしばしば目にするが、「大儀名文」と二文字まで変換ミスをした例は珍しい。「たいぎめいぶん」という全体を変換せずに、「たいぎ」と「めいぶん」に二分割してそれぞれを変換し、結果的にどちらともまちがってしまったのだろう。正しくは、「大義名分」。

【こすもす・143号・一九九八年六月号】

不動産会社の宣伝用の小冊子である。そこに、横浜市金沢区の称名寺の案内が載っている。その一節。

また、金堂前の鐘楼には広重の金沢八景にも描かれた称名の晩鐘があります。

「鐘楼」は、「鐘楼」の誤り。「しょうろう」と入力して変換すれば「鐘楼」が打ち出されるのだが、入力した人物が「しょうろう」という日本語をよく知らなかったのか、「かね」と「くら」を合成した熟語と即断して、そのように一字ずつ入力してしまったのだろう。「桜」と「楼」、似て非なる漢字である。漢和字

典でそれぞれの「正字旧字体」を調べてみてほしい。戦後の漢字改革で、たまに似てしまったのである。

ちなみに、「鐘」の字は、「鍾愛する」という時の「鍾」(ショウ、あつめる)という漢字とよく似ていて、これもよくまちがわれる。「鐘」を「鍾」と印刷することはないが、「鍾」はほとんどと言ってよいほど「鐘」と誤植される。「鍾」は、韓国では人名にもしばしば用いられるので、国際親善という意味からも「鐘」と「鍾」の区別を知っておいた方がよい。

この小冊子は、さらに金沢の新名所である「八景島シーパラダイス」の案内に入る。その一節。

西の丘陵に広がる金沢自然公園では、四季折々の草花が美しい森や、コアラを始めとする世界中の草食動物が真近に見られる動物園が子供たちに大人気、家族連れで1日中楽しむことができます。

「始め」は、「初め」あるいは「はじめ」の方がよい。「大人気」の次は、読点(、)ではなくて、句点(。)の方がよからう。「1日中」というアラビア数字も、違和感がある。今の若者はこういう場合に、ほとんど「1日」などというアラビア数字を用いるようだが、「1日中」という漢数字が望ましい。まして、「第三者」という日本語の場合に、「第3者」という表記を採用することは論外であり、絶対に避けるべきである。

また、「真近に」という漢字の当て方は、どうだろうか。「まちか」とは、間隔が詰まっているということだから、「間近に」とあるのが正しい。空が「真つ青」だったり、頬が「真つ赤」なのとは意味が違う。語源も違うのだ。

さらに不満を述べれば、わたしは個人的に「子供」という漢字を使わないことにしている。「子ども」と表記するのが、わたしの原則である。ただし、「子供」でどこが悪いのかという疑問も当然予想されることなので、「わたしは『子ども』と書きます」とだけ、今は申し述べておく。子どもは、決して親や誰かの「お供」ではないからであり、そもその語源は「複数を示す『ドモ』であり、「供」は当て字だからである。

【一九九八年五月三十一日・朝日新聞・朝刊・16面】

読書欄である。プロの書き手の揃った朝日新聞の編集委員の中でも、屈指の名作家とされるのが、河谷史夫氏である。その河谷氏が、『いのち、響きあう』と

いう書籍の書評を執筆している。その冒頭の形式段落を引用する。

あたかも四十の昔になるが、ボタ山に見える九州筑豊の炭鉱の町に上野英信と晴子、谷川雁と森崎和江という二組の男女の生が、一時期交差したの偶然だったか必然だったか。ときに奇跡的としか呼びようのない輝きを発する人の出会いがあるものだが、文芸誌「サークル村」から放射したこの四人の人生の軌跡はこんなに十分にたどられてよい。

なかなかの名文である。この張り詰めたトーンで最後まで書きつがれ、緊張感に途切れない。読書行為がどのような感動を書評者に与えたのか、肌に伝わってくる。同じ書評委員の中には、若い女性の軽薄な会話体で書物を批評しようという見当違いの無礼者もいるので、彼女にはこの河谷氏の爪の垢（あか）でも煎（せん）じて飲ませてやりたい。

このような名文なのだが、「あたかも四十年前の昔になるが」の部分が変わりにくい。「あたかも」には、「AとBがよく似ている、さながらである」という意味と、「ある時期に二つのことがちよとど起きた、二つの出来事が起きたのがちよとど同じだった」という意味とがある。河谷氏の「あたかも」は、むしろ後者の方である。だから、わかりにくいのである。

ボタ山に見える九州筑豊の炭鉱の町に上野英信と晴子、谷川雁と森崎和江という二組の男女の生が、あたかも四十年前に一時期交差したのは、偶然だったか必然だったか。

このように、書き直した代案を示したが、どこかしっくりこない。「あたかも」は、「交差する」を修飾するのである。そうであれば、「あたかも四十年前になるが」という書き出しは、「あたかも」が「四十年前になる」を修飾するものと読者に読まれかねない。しかし、そのように書き直してもしっくりこないから、わたしが書き手であれば「あたかも」という気合の入った副詞の使用は涙を呑んで諦める。「時あたかも」と書き出せば現在のままでもそれでよいようにも思えるが、そうでないようにも思え、日本語はむずかしい。

また、最後の部分の「この四人の軌跡はこんなに十分にたどられてよい」という箇所も、ややわかりにくいところがある。無生物主語の受身形だからであろうか。

【一九九八年五月二十九日・朝日新聞・夕刊・7面】

紙面の下部に、海外旅行の宣伝が載っている。「トルコの旅説明会」というコ

ーナーがあり、

会場 幣社会議室

と印刷されている。これは、「弊社」の変換ミスである。けれども、よほど安いワープロでも、「へいしゃ」と入力すれば、正しく「弊社」と変換してくれるはずである。正しいのは「弊社」だったか「幣社」だったか自信がなければ、辞書を引いて確認すること。辞書が手元（わたしは「手許」という漢字が好きである）になれば、「小社」と表現すればまちがえようがなくなる。へりくだる必要がないと思えば、「本社会議室」でもよからう。

【一九九八年五月十八日・朝日新聞・朝刊・35面】

社会面の下部に、世田谷美術館で開催中の「三星堆」（さんせいいたい）の展覧会の広告が載っている。

三千年以上も前、殷・周の時代に、

長江上流の四川盆地に、

高度な文明を誇る王朝が存在した！

中国古代史の新しい謎、三星堆。

ここでわたしが打ち出した文章では、どこにもまちがいはない。ただし、実際に紙面に印刷されていたのは、おそらくデザイナーの手書きの筆跡なのであろう。今流行の「小町体」の活字の雰囲気では書ききされている文字だと考えてほしい。「殷」の漢字の右側の「旁」（つくり）が違っていた。正しくは、この旁を「るま」と通称しているように、片仮名の「ル」と漢字の「又」を合成したものである。ところが、印刷されていたのは、見たこともない「文」であった。「るまた」を知らずに、勝手にデザイン化してしまったのであろう。

ちなみに、同時に作成された活字の展覧会チラシでは「殷」と正しく印刷されていた。当然のことであろう。

【一九九八年五月・三岸節子展・案内チラシ】

日本橋の三越本店で入手した。裏に、三岸画伯の経歴が詳しく紹介されている。その中の一節。

1968年には、新境地を求めてフランスに渡ります。

ヨーロッパ各地を旅行し、意欲的な日本の画壇とは一線を画した創作活動に専念します。

この文章のままでは、「日本の画壇」が意欲的な活動をしていた立派なものになってしまふ。そうではなくて、「日本の画壇」は閉塞（へいそく）していたが、

三岸節子は「意欲的な活動」を展開したというのであろう。ならば、

ヨーロッパ各地を旅行し、日本の画壇とは一線を画した意欲的な創作活動に専念します。

とあるべきであった。「意欲的な」の位置をずらすということである。

ちなみに、朝日新聞一九九八年五月二十六日夕刊5面で、この展覧会の模様が一面全部を使って紹介された際には、表現未熟の箇所は見当たらなかった。

3 結びに代えて

新聞を主たる材料としながら、日本語の乱れを指摘するという作業は、考えてみれば空しい作業である。他人の書いた文章の「欠点」を論う（あげつらう）のだから、人間の性格もだんだん悪くなる。

わたしは、この論文でことさらに朝日新聞の粗探しを試みたが、それは朝日新聞に対して特別な感情をもっているためでは毛頭なく、それを購読していて最も身近な存在であるためである。朝日新聞ですらこうなのだから、他の新聞も同様であろう。あるいは、もっとひどい事態が出来（しゅつたい）しているかもしれない。

この論文の中で、わたしは言いようのない「憤り」に駆られて、しばしば激越な弾劾文（だんがいぶん）をものしたこともあった。その怒りは、文章の書き手に対して向けられているのではない。どうしようもない文化状況の中をわたしが生かされていることに苛立ち、自分自身が文筆に携わる立場にありながら、悪化する一方の「日本語の乱れ」に何の処方箋も持ち得ない非力な島内景二本人に対して向けられた刃だと考えていた。だいたい。

この論文の最後に、『月刊国語教育』一九九八年八月号に掲載された拙文を再録させていただきたい。題して、「面白うて、やがて悲しき誤植かな」。いくつか小見出しが付いている。

在原業平の和歌？

一九九八年五月七日の朝日新聞朝刊の広告（企画・製作 朝日新聞社広告局）

を見ていて、驚いた。軽井沢の別荘の広告である。

いつとてか我が恋やまむ千早振る

浅間の嶽の煙たゆとも

新古今集 在原 業平

古くは鎌倉時代に、歌人たちに詠われた浅間山。日本有数の別荘地として知られる軽井沢の象徴ともいえる浅間山の景観は、いつの時代も人々の心をとりえる魅力をもっている。

別荘の具体的説明の前に、文化的な香気をプレミアムとして付加しておこうという意図から、このような文章が書かれたものであろう。だが、たったこれだけの文章の中に、いったいいくつかの「誤記」があるのだろうか。

「詠われた」を「うたわれた」と読ませるのは、まあ大目に見よう。意味的に二句切れであるこの和歌を、慣用的に（正月の百人一首の悪しき影響だろう）三句目で改行してしまうのも、世の中全体の悪風だから、この広告だけの誤謬ではないと許そう。現代風に、姓と名を一字明けて「在原 業平」と標記しているのも、まだ許せる範囲である。

けれども、浅間の「嶽」に「かく」とわざわざ間違ったルビを振った神経には驚かされる。「あさまのたけ」に決まっているではないか。和歌では、ほとんどの場合が訓読みの大和言葉を用いる。

次に、この和歌の出典であるが、「新古今集」の「在原業平」の作だと書いてある。これが、どうにもわたしの記憶にはないのである。『伊勢物語』には、在原業平をモデルとして入っていると考えられる「男」が登場し、その東下りを語る八段に、

信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やほとがめぬ

という和歌が挿入されている。それが、『新古今和歌集』の巻一〇・羈旅・九〇三に「業平朝臣」作として入っている。また、『新古今和歌集』の同じ巻の九五八には、

いたづらに立つや浅間の夕煙里とひかぬるをちこちの山

という飛鳥井雅経の和歌が入っている。しかし、新聞広告にあるような「いつとてか」の和歌は、ついに『新古今和歌集』の中には発見できない。『新編国歌大観』の索引で調べると、何と『拾遺和歌集』の巻一一・恋一・六五六に、「いつとてか我が恋やまむ千早振る浅間の嶽の煙たゆとも」という問題の和歌があることがわかる。その作者は、「よみ人しらず」である。結局、「新古今集 在原

業平」とあるのは、「拾遺集 よみ人しらず」が正解だったのである。

また、「古くは鎌倉時代」とあるのも、どうにも語感がよくない。鎌倉時代は、そんなに古い時代なのだろうか。よしんば、仮に「いつとてか」の和歌が業平の作で『新古今和歌集』に入っていたとしても、業平の歌は平安時代に作られて鎌倉時代の勅撰集に収められたのだから、「古くは平安時代に」と書くのが正しい。実際には、『拾遺和歌集』の歌なのだから、「古くは平安時代に」と書かねばならなかったことは、言うまでもない。

この広告は、恰好の教材であると思えたので、大学の講義でも使わせてもらった。学生たちも、笑いながら聴いてくれた。

「やむおえず」?

この五月に、代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで、研修会の講師を務めた。そのついでに、その「宿泊利用のガイド」という注意事項を記したパンフレットをもらってきた。そこには、次のような文章が見られた。

やむおえず、バス・講師送迎用・研修機材運搬用の車両を駐車する場合は、正門で駐車票を受け取り、所定の場所にお願いたします。

「おやつ」と思っていると、

荷物はできるだけ利用当日にお持ちください。やむおえず事前に送る場合は、必ず利用期日、団体名またはグループ名をお書き添えください。

という文章も目に飛び込んできた。これは、まずいのではないか。「やむおえず」は、むしろ「やむをえず」の誤植である。

しかし、この誤植には根深い問題があるように思う。わたしは、これまでの人生で何千回何万回も『広辞苑』のお世話になった。『広辞苑』の力でわたしの教養形成がなされたままで感謝している。そのうえで言わせてもらえば、『広辞苑』の項目の立て方にはどうにもなじめないものがある。「表音式仮名遣い」にしたがって見出し語が示され、現代仮名遣いはいくで注記されている。だから、「こんにちわ」とあるのは、見出し語としては「こんにちわ」であるけれども、仮名遣いとしては「こんにち」が現代でも正しいことを意味している。この「凡例」を読んでしっかりと理解してさえおけば、

やむをえず

という見出し語が『広辞苑』にあっても、「やむをえず」が表記として正しいことは自明である。しかしながら、凡例を読んでいない読者は（それが大多数だろ

う）、天下の『広辞苑』、権威ある『広辞苑』にゴチックで「やむおえず」と見出し語が印刷されており、「を」は小さく注記されているだけなので、正しくは「やむおえず」であり、「やむをえず」は現在では使われない歴史的仮名遣いだと思ひこんでしまうのである。

かく言うわたしも、『広辞苑』を根拠として、「じ」と「ぢ」と「づ」とを誤ったふうに訂正せよと編集者から要求された苦い経験が何度もある。プロの編集者ですらそういう錯覚をしてしまうのだから、仮名遣いの問題は相当に根深いと言わざるを得ない。

「漂白」された芭蕉の魂

気になりだすと、次から次へと誤植が目に見え込んでくる。一九九八年五月十三日の毎日新聞の夕刊。歌舞伎座の「六月大歌舞伎」の予告広告がある。「日本振袖始」の内容紹介として、

素盞鳴尊のヤマタノオロチ退治の物語を綴った舞踊劇。美しい岩長姫が、酒を飲み酔う内にオロチの本性を現し、最後は隈を取った凄まじい姿で素盞鳴尊と大立回りを演じる。

とあった。むしろ、「素盞鳴尊」は、「素盞鳴尊」とあるのが正しい。誤植の定番ともいえる例だが、ここで紹介しておく。

また、一九九八年五月二十八日の朝日新聞夕刊は、俳人の黛まどか氏が『ハムレット』のオフィーリアの気持ちに歌った俳句が、オペラに挿入されたと紹介している。黛氏は、

会ひたくてすみれ萎れるまで唄ふ

などの俳句を作ったという。「会ひたくて」「唄ふ」と、歴史的仮名遣いで表記されていて、好感が持てる。けれども、

すみれすみれ忘れぬようにしてあげる

という句には、首をかしげた。歴史的仮名遣いでは、「忘れぬやうに」でなければ正しくはない。つまり、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いとが、混合しているわけだ。

最後に、一九九八年六月二日の朝日新聞夕刊の文化欄。「詩歌文学館賞を贈呈」という記事。川崎展宏氏の俳句開眼をもたらしたのが松尾芭蕉だったという記事の中で、「蛸壺やはかなき夢を夏の月」の句に関して、

余韻として伝わるのは芭蕉の漂白の魂だ。こんな、人が読んでいいんとな

る句が作りたい。

と吐露されている。さすらいの俳聖・松尾芭蕉の「漂泊の魂」が、いつの間にか「漂白」されて真っ白になってしまった。面白くて、やがて悲しき誤植であった。

(一九九九年十月二十日 受理)

Errors of the Japanese Language in the Latest Newspapers

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

This paper indicates various errors of the Japanese language in the Asahi-shinbun. There are many errors in news items and newspaper advertisements.

1. printer's errors (homonyms)
2. misuse of *kanji*
3. misuse of *kana*
4. unsuitable particles
5. distortions of subject and predicate
6. ignorance of Japanese culture

キーワード 日本語の乱れ、誤植、誤字、仮名遣いの混乱
表現未熟、文化理解の不足

Received on October 20, 1999.
Department of Electronic Engineering